

## ジャンプ小説大賞一次通過

### 『DEAR PSYCHOPATH』

原稿用紙換算190枚

鎌田庸 著

乾いた風が、僕の耳をかすめたとおつた。 たった今夢から覚めたような気分で、ゆっくり辺りを見回す。 その風景はおぼろげではあるが、確かに僕の知るものだった。 風がそよぐ度に微かに揺れる、 広大で青々とした芝生の絨毯。 女性の優美な胸にも似た丘の連なり。 そしてそれを、 パステルで擦ったような淡い青が、 優しく包みこんでいる。 まさしく絵に描いたような絶景だ。 こののどかな大自然の中で聞こえてくるのは、 乾いた砂を踏む二人分の足音と、 隣を行くベッキーの甲高い声だけである。

「ねえねえヘンリー！ あれはなあに、 ほら、 あの変なもの」  
彼女は喜々として、僕の袖を少し強めに引っ張った。 真っ白な肌にパツチリとした青い瞳。 ブロンドの、さらさらとした長い髪が似合う、まるで人形のような愛らしさをもつ子だ。 それゆえに、僕自身大きな葛藤に悩まされることも少なくはない。 彼女の持つ魅力。 それを思い知らされる瞬間、愛しさの余りに、僕自身の手で彼女を壊したくなることも時折ある。 その衝動が頭の中でムクムクと目を覚ますうとする度に、僕は体中に見えない鎖を巻きつけるのだつた。

「ねえヘンリー、あれ何ってば！」

僕の返事が待ちきれなかったのか、ベッキーが再度、僕の袖をひっぱる。

僕は体をかがめ、

「どれ」

と彼女の指さす方へと目を向けた。

「あれ！ あのおもちやみたいなやつ！」

するとなるほど、すぐ近くの木陰に何やら酸化しかけた鉄の塊がポツンとたたずんでいる。 緑の彩るこの景色の中で、その黒ずんだものはいささか滑稽に見える。僕は短いため息の後に、にべもなくその質問に答えた。

「水道の死骸だ。 かなり古びているようだし、 十年以上前

のものだろうな」

「ふーん。すごいね！」

ベッキーは大きな瞳を丸くして感嘆の声をあげた。どうやらあれを見るのは初めてらしい。とはいえ、僕としてもあそこまで黒ずんだ水道は初めてお目にかかる。

「もうお水出て来ないのかなあ、あの水道」

指をくわえたままで、彼女はポツリと言った。

「もし仮に出て来たとしても、あそこまでボロボロに錆びていたら飲む気になるか？」

言われたベッキーはこつちを見上げたままでプルプルと小さな頭を振った。当然だ。あんな所から出てくる水なんて、鉄臭くて、泥臭くて、まずは飲めたものではないだろう。最悪の場合、コレラにでもなつて、あの世とこの世を行き来するはめになるかもしれない。

「ヘンリー！ヘンリー！あたしあの水道で遊ぶ！」

けれどどうやら、ベッキーにはそれが分からないらしくかった。彼女は握っていた僕の袖を離すと、古びた水道へととんでいってしまった。僕はやれやれと首を振った。

「つたく、おいてくぞ。こんなところで油を売っている暇はないのだからな！」

それでも彼女の好奇心が止むことはなく、僕の見ている前で錆の部分をついで削つたり、臭いを嗅いで、下や上と、角度をかえては不思議そうに観察を続けている。こういう所がまだ子供だというのだ。

「先に行っているぞ！」

待ちきれなくなった僕は、吠えるように言った。人一倍待つのが嫌いなのだ。何故か僕一人だけ、時間を無駄にしているような気がして、どうしても耐えられないのである。それに声を張りあげたのには、もう一つ別の理由がある。多分、今のはそれが大半を占めていた。チツ・・・と、舌打ちをして、歩きだし、ふと立ち止まる。後ろを振り向く。ベッキーは依然として、水道と戯れている。

一体あれの何が楽しいというのか、誰か教えてくれ。僕は、心の中で呟いた。と、同時に、その中には言葉では言い表せない程の渴きと、空虚感が幾つもの芽を伸ばし始めていた。飢えが始まったのだ。僕は右手で自分の胸板を力いっぱい握ると、きしむ程歯を食いしばった。

苦しい・・・苦しい・・・苦しい・・・

渴いている・・・欲しくてたまらない・・・

邪悪で、真っ黒な憎悪が、ゆっくりと目の前を曇らせていく。僕がさっき吠えたもう一つの理由とは、この渴き、いや、もっとの確な言い方をすれば、飢えと言うべきであるのか。とにかくそれは、ある時、突然予告もなしに訪れるのだった。しかも、どれほど巨大なもので来るのか、本人にもその予測は不可能。そして今まさに、それは訪れていた。こうなると気を静めるには唯一の方法をとるしかない。

「ベッキー！ベッキー！来い。飢えが始まった！」

ベッキーは、その荒げた声からただならぬ事態を感じとったのか、小さな耳をヒクヒクさせると、遊ぶのを止め、僕の元へ走りよった。

「どうしたのヘンリー！どこか痛い？」

僕は、かぶりを振った。

「飢えだ、いつものやつが来たんだ。これから狩りを始める、お前は少しの間そこら辺に隠れている。いいな、分かったな！」

何度も念を押してベッキーの肩をとって揺ると、彼女はコクコクと頷いた。

やがて彼女は僕から少し離れた茂みの中へと入っていった。僕がこれから何をしようとしているか。もうこれで何度目かになるので彼女もよく理解しているのだ。茂みの中のカサガサという音がなくなると、再び視線を前へ戻す。肝心の獲物を見つけるためだったが、運よく一目で見つけることが出来た。

たちのぼる陽炎の中を、人の姿のようなものが一緒にあって揺らめいていたのだ。かなりぼんやりとしか瞳には写らなかったが、屋気楼ではあるまい。僕は考えた。瞬時に、そのデータを、経験という名のフロッピーからとり出した。ここから見るに、獲物は女性。しかも辺りを見渡しても、民家らしいものはどこにも見当たらない。よってここらに住む者ではないはずだ。答えは出た。僕はいよいよ沸きあがる興奮を、見舞われた海のように、胸の中に踊らせた。

「旅行者か」

腰にさしてあったナイフを手にとり、刃に映る両目を眺める。完全に狂った者の目付きだ。

けれどこれでいい。これが自分には似合う。そう、殺しをゲームとしか思えないこの僕にとっては。

そうこう考えている間にも、獲物は徐々にこつちへ近づいて来ている。僕は生暖かいつばを飲み、

「来い、殺してやるから」と呟いた。

獲物は思っていたよりも若かった。二十代前半から、三十代に入るかどうかというところで、色も透けるように白く、あの中に本当に内蔵が詰まっているのかと思わせる程の細身だ。服装にしたってそうだ。この夏の日差しを避けるためだろう。上下、白一色のいでたちで、それがまた彼女を清楚で可憐な花に仕立てあげていた。

「さあて、その体の中身、どうなってるんだろうな」

押さえ切れない衝動が、僕の欲望のドアをノックする。

まだまだ！自分に言い聞かせる。まだ動いちゃいけない、逃げられたらどうする？ また最初から、やり直した。もう少し・・・後少し・・・。手足に伝えようとした脳からの信号を、なんとか押さええると、今度は体中が脈打って鼓動を速まらせた。獲物の微かな足音が、両耳に入ってきた。あと数秒だ。そしてその体が僕とすれ違おうとした、わずかにひとこまの出来事だった。一刹那、僕から表情が消え、手に持たれていた命をさばく爪が難無く獲物の胸に潜り込んだ。そうなった瞬間に音はなく、心地よい感触だけがこの右手から、全身に伝わった。獲物は、自分に何が起きたのか分らず目をしばたいている。だが、そこまでだ。僕の赤い血の付いた爪が、その綺麗な目玉をもえぐり出すことによって、走馬灯さえ見られないようにしてしまった。僕は息のなくなった肉の塊を、今度は無差別に傷つけ始めた。

それはまるで、どんな思いにも忠実に従ってくれる、幼い頃よく遊んだマリオネットのような動きだ。しかし手を止めると、真っ赤な涙を流している人形はその場へゴロリと崩れ落ちてしまった。僕の狩りは、ここで始めて幕を下ろしたことになる。あとは・・・と、後ろを振り向くと、ベッキーが茂みの中からひょっこりと顔を出している。僕からのサインを、今か今かと待ち兼ねているのだ。僕が人差し指をクイクイ動かし、「来いよ」のサインを送ると、彼女は主人に呼ばれた子犬のように、そそくさと走りよって来た。

「遅い！遅いよヘンリー、あたしずっと待ってたのに」

と顔中を笑顔にしながら彼女は言った。

「こうしてお前にも形なりに狩りをさせているだろ。それ

だけでも感謝しろよ」

僕は肩をしゃくりながら言った。たった一度の狩りで疲れを起こすとは、いつまでも若いつもりで生活してはられないらしい。

「ねえヘンリー」

僕の隣に立ち、転がっている靴のつま先でつつきながら彼女は顔をあげた。僕はそれに返事はしなかったが、その沈黙を許可だと自分なりに理解して、彼女は早速いつもの仕事の仕事を始めた。小さな獣の、狩りの始まりである。彼女の狩りの内容は、僕のそれとは大きく違っていた。僕の獲物の対象は生あるものであり、それを屍に変える所に胸震いする程の満足感を感じていた。しかし彼女は、屍をいじくる所にそれを強く感じているのだった。自分の非力な両腕で、自分よりも大きなものを従えるという征服感。それを楽しんでいた。彼女は僕の見ている前で、惨めたらしく転がる屍を、感じるままにいたぶって見せた。屍は性別も分からない程崩れていった。それはまるで肉で出来た、スポンジのようだった。ベッキーはそれを心臓マツサージするかのように、グッグツと押しつけては歓喜の声をあげている。傷口からは、まだ熱のある血液が溢れ出て、その度にベッキーは脳に突き刺さるような声で笑っていた。無邪気に、純粹に、幼子の瞳を輝かせて・・・彼女は獲物の鮮血を浴びた。

瞬間、僕は大声をあげ、跳び起きた。呼吸困難に襲われ、必死にそれをとり返そうと、痙攣する体を両腕で抱いて気を静めた。数秒後・・・何とか落ち着きをとり返し、僕はゆっくりと辺りを見回した。けれどそこには、あの、人々が理想とするような大自然も、小さな狂気ベッキーも、気の毒な屍も瞳には映ってはいなかった。僕は堅くなっていた肩を落とした。安堵が胸から始まり、全身に広がっていたのが分かる。今、僕の視界にあるのは読みかけの雑誌、食べかけのスナック菓子の袋、そして本棚やテレビ・・・まさしくそこは、乱雑した僕の部屋だった。

「また・・・あの夢か」

カーテンの隙間から、焦げ付くような日差しが差し込んで来ている。どうやらもう、日の位置が相当高くなっているらしい。僕は短くため息をつくとき、汗ばんだ両方の手のひらをシートへ拭いた。夢の中で犯した罪の感触が、まだこの手に残っているような気がした。

「悪夢、だ」

体の節々が痛む。僕はけだるい体をもちあげるように床に立ち、よろめきながらキッチンへ向かった。先週から訪れた、夏の異様は暑さのためか、それともさつきまで見ていた悪夢のせいなのか、どちらにしろ唾を飲み込むことも出来ない程、非常に喉が渴いていた。冷蔵庫を開けてみても、たいしたものが入っていない。飲みかけのミネラルウォーターがある。とりあえずそれを取り出すなり、口へ突っ込む。あっと言う間に空になったボトルを、ゴミ袋へ放り込み、力なく腰を下ろす。水を飲んで、喉の渴きは満たされたものの、まだどこか他が渴いているような気がして、どうも頭の中がはつきりとしない。

「誰か助けてよお」

返事はない。当前だ。一人暮らしの短所、それは発作的に誰かと話をしたくなつた時に、誰もそばにいないということではないだろうか？

僕は今年の春、幾つかの大学受験をことごとく失敗していた。勉強を怠つたつもりはない。多分、他の誰もが僕以上にがんばった結果だと思う。そして、僕の一人暮らしは最後の合格発表に、自分の番号がのっていない時点で決めたことだった。そのことを両親に話しても反対の意見はなく、そればかりかそれを喜んで了解してくれているようだった。かわいい子には旅をさせろ。と、いうことだろうか。まあ何はともあれ、そういうわけで僕の一人暮らしがはじまつたわけだが、ここで一つの悩みが生まれた。それは、僕の中の良心を、理性を、常識を、徐々に蝕んで行くのだった。比較的楽観主義者な僕を、こうまで悩ませるその種は、さつきも見ていたあのわけもわからない殺人劇にある。それを見始めたのは、今からちょうど一週間前。その日はどうしたものか、体中に何ともいえないだるさを感じた僕は、家にたどり着くなり深い眠りへと落ちていった。そしておかしな話だが、夢の中で目をさますような奇妙な感覚を覚え、僕は再び目を開けた。そこは風の吹き抜ける、絶景だった。どう考えても日本じゃない。それだけは確かだ。また、その世界での僕は、ヘンリーとよばれている外国人だった。歳もそんなに若くはない彼の隣には、いつもかわいらしい女の子がついていた。名前はベッキー。本当に、人形のような顔立ちの子供なのだが、彼女もまた、ヘンリーと同じく反吐が出そうな程の凶悪殺人犯なのだ。そしてその夢は、今日まで、まるでエンドレステープのよう

に流れては僕を苦しめた。何か、現実の世界と夢の世界、二つの人生を生きているようだ。ふと、重たい頭をもたげ、壁にかけてある時計へ目をやると、時計がそろそろ二時になるうとしていている。僕は慌てて立あがり、汗の染みたTシャツを洗濯機の中へ放り込んだ。まずい！今日は午後から約束があったのだ。あらかじめハンガーにかけて、用意しておいたチエックのワイシャツに手をおし、ひざの破れたジーンズへ足をおす。チラリと鏡に顔を映し、「よし」と、小さく頷く。そして少しよろめきながらも、財布を片手に、玄関まで走った。遅刻だ！完全に大遅刻だ！約束の時間は一時。近くの公園のベンチで待ち合わせのはず。

「くっそー！」

僕は悪態をつきながら、靴のかかとをつぶしたままで外へとび出し、鉄の階段を、一つとばしで降りていった。

「ふーん。そりゃ随分とお寝坊さんだったわね」

歩道を流れる人ゴミの中で、鈴菜は憤然と言った。無理もない。

この暑い中、一時間近くも外で僕が来るのを待っていてくれたのだ。

怒るのも当然だ。

「ごめん。最近疲れているみたいでさ」

鈴菜は横目で、しゅんとした僕の顔を見るなりプツと吹き出した。

「嘘よ、そんなにおかしな顔しないでっば」

「お、おかしな顔とは何だよ。おかしな顔とはさ。失礼だな。」

内心ホツして、僕は言った。もしもこのことがきつかけで、僕ら二人の關係に溝ができたらどうしようかとびくついていたくらいだ。

「でも・・・」

付け足して彼女は言った。

「今日、この後トリプルアイスおごってよね」

「いいよ。それでお前の機嫌が直るならどんどん食べ」

すると彼女は、いたずら好きの猫みたいに瞳を輝かせて付け足した。

「あとはねえ、お好み焼きとクレープとピラフとラーメンとケーキと、あとそうだなあ今度はどこかレストランで食

べようか？も・ち・ろ・ん、全部、忍のおごりね」

「・・・」

顔に笑顔を張り付けたまま、無言で空を見あげる。

「もお、またすぐそつやってシヨック受ける。冗談よ冗談！トリプルアイスだけでいいってば！ほら行こうよ。立ち止まっらないでさ」

そう言つと鈴菜は、僕の肩を小突いてさつさと一人で前へ歩きだしていた。彼女の場合、冗談めかした言葉の中にも『あわよくば』とい本音が交じっているようで怖い。

「ったく。おい待てよ」

鈴菜とは、高校の時に彼女からもらった手紙（いわゆるラブ・レターというやつ）がきつかけで、気がつくと恋人と呼べる間柄になっていた。その時の彼女は、まだ今のよつに髪の毛も長くはなく、まるで男の子のようなボーイッシュな感じだった。ただ中身は、二年経った今でもちつとも変わつちやいない。明るくて、真つすぐで、でも本当はガラスのようにもろく繊細で。僕はそんな全ての要素をひっくるめて彼女が好きだった。

「ねえねえ忍。あのぬいぐるみ、とれる？」

ゲームセンターを見て立ち止まった鈴菜が、入り口にあるクレインのゲームを指さして言った。彼女の細い指は、真つすぐに小さな青い鳥のにぐるみをさしている。

「さあ、とれるかな」

と、僕は首をかしげた。実は、この手のゲームはあまり得意ではないのだ。

「んー。とれなきやいいけどね」

そう言われると、意地でもとらなければならなくなってくる。僕はさつそうと財布をとり出した。

「ちよつ、ちよつと！お金は私が出すつてば」

鈴菜が慌てて、自分の財布をとり出す。

「いらない」

僕は彼女を横目に笑った。

「うまくとれたらもううよ。とれない確率の方がでかいから」

「普通は外したらもううものでしょ」

と、鈴菜はふくれた。何かあるといつもこうしてふくれるのだ。

「それじゃやるか」

僕の声に、彼女の片方の肩がピクリと動く。狙いはあの、青い鳥だ。クレインを横へ動かし、止め、前へ動かす。よ



し、ぬいぐるみの真上だ。ボタンを離す。クレーンはそこで止まり、徐々にその手を広げて降りていく。僕は固唾を呑んだ。多分、鈴菜も同じだ。そのしてその人形は、しっかりとクレーンに捕まった。

「よし！」

と、嬉しさの余りガッツポーズを作って声を張りあげる。横では鈴菜が、耳をふさぎながら笑っている。

ゴトンツという音が足元でしたかと思うと、それは既に鈴菜の両手に抱かれていた。

「ありがとう！」

彼女は顔中を笑顔にしながら言った。まあここまで喜んでくれたら、僕としても嬉しくないわけがない。僕は得意げに鼻をすすると

「お前こんなんで嬉しいのか。もうすぐ二十歳になるのに」「うん」

彼女はまたふくれた。けれどそれよりも嬉しさの方が上だと見えて、すぐにまたコロコロとした笑顔に戻った。

「本当に嬉しそうだな。お前」

「うん！」

コクコクと頷く。子供みたいだ。

けれど僕が、

「さあ……」

……行こうぜ、と口を開きかけた。その時だった。突如、背中の中心が熱い何かに刺されたような感覚を覚え、驚いた僕は息と一緒にその言葉まで一緒に飲み込んだ。

何だ、と後ろを素早く振り向く。が、何もなし。人の波だけだ。僕は目だけで辺りを見回した。やっぱり怪しいものはない。

「どうしたの？」

心配そうに、鈴菜がのぞき込んでくる。僕はヨロヨロと首を振った。

「何でもない。気のせいだ」

「本当？さっきの忍の顔、すごく怖かったよ」

僕は吹き出した。

「まったく。今日はあれだな、おかしい顔って言われるは、怖い顔って言われるは……まったく。言われ放題だな」

「わ、私そんなつもりじゃ！」

「嘘だよ。ちよっとからかってみただけだって」

どうにか笑顔を作ってみたが、それがどんな顔になっていたかはよく分からなかった。というのも、背中を感じた

痛みが、僕の中で何かを目覚めさせたような気がして、どうにも胸騒ぎが治まらなかつたのだ。僕はもう一度後ろを振り向き、注意深くそこら辺を見直した。けれど、やっぱり何も無い。気のせいではないはずだ。さっき、僕の後ろには確実に何かがあった。

ゲームセンター、レストラン、古着屋と、僕らは思いつく限りの店をてんてんとした。そして、ちょうど今、本屋を出たばかりだ。鈴菜がどうしても言うので立ち寄つたのだが、結局目的の本がなかったのか、手ぶらで店を出て来てしまった。

「うーん。今日の発売だったのになあ」

と彼女は残念そうに言った。

「どうする？他の店にもよる？」

「いや、いいや」

彼女は首を振った。

「それよりもトリプルアイス食べにいこう！実はさっきから、そのことで頭がいっぱいだったの」

僕は鈴菜を先頭に、駆け足で人の間をぬつた。日がまだ落ちていないとはいえ、時間的にはとくに夕方なので、軽く走っても汗をかくまでには至らないのだ。少し行くと、太い道路を挟んだ向こう側にアイスの看板を掲げた建物が見えた。けれど信号がチカチカと点滅している。

「あっちゃー。赤だ！」

彼女は立ち止まり言った。

「あそこの信号が青になったらダッシュしよう。ここの交差点広いし」

同じように立ち止まり、向こうに見えるアイス屋を指して言つと、鈴菜は、うん、と頷いた。とはいえ、ここの信号は僕の知っている限りそうすぐには青にかわらないはずだ。僕はその場へしゃがみ、ほどけかけた靴紐を結び直すことにした。

ところが、その瞬間、僕の手は凍りついたように靴紐をつかんだところで、止まっていた。例のごとく、あの突き刺さるような感覚が原因だ。そして僕が顔をあげようとすると、彼女が悲鳴をあげ、僕を呼ぶのとはほぼ同時のことだった。

「ちよっと、忍！あれ見てあれ！」

「え？」

鈴菜を見あげ、彼女の指さす方を見て・・・絶句した。自分の目を疑った。なんと、目の前に映るおよそ二十メートルはあるだろう交差点を、一人の男が赤信号にもかかわらず、こつちへ向かって歩きだしていたのだ。僕は両目をしばたいた。男の目は、真つすぐに僕らを見ていた。いや、僕を見ていた。そして分かった。さつき感じたあの突き刺さるような感覚は、彼のあの尖った視線だったのだ。しかし、今更そんなことが分かってどうなるというのだ？それよりも彼は何者なんだ？何故僕は、この言葉では何とも表現出来ない奇妙な感覚に襲われているんだ。クソツ！動かない、体が、体が意志になつたように動かない！

僕は心底震えた。困惑の色が、顔中に広がっていくのが分かった。彼から目の離せなくなつた僕には、その足音だけが聞こえてきた。そして徐々に、その視界までもが範囲を狭め、ついには彼を避けて行く車の音も、映像も、やじ馬の声も、僕の隣で心配してかけてくれる鈴菜の声さえも、この耳には入ってこなくなっていた。

「！！」

そして我に返ると、目の前には交差点を渡りきつた彼が立っていた。僕は息を飲んだ。男は僕よりも一つ分背が高く、髪の毛も背中につく程長い。顔付きはまるで女性のようにきめ細かく出来ていて、どことなく異国人を思わせる風貌だ。僕は無言のまま、その顔を見つめた。彼は一度だけ自分の髪をかきあげると、腕の陰に見え隠れする顔の表情を崩して言った。

「お迎えにあがりましたよ。西那忍さん」

そして景色は流れていった。

どれくらいスピードが出ているかはメーターを見ていないで分からないが、相当の速さで走っているということだけは分かった。ふと横を見ると、すぐ近くに青い水平線が見える。海だ。ここからじゃ砂浜は見えないけれど、きつとそこには海水浴に来た人がわんさかいるはずだ。

「あんまり身を乗りださないでください。吹っ飛ばしますよ」と運転席から、彼が言った。この強い日差しを直に浴びているせいか、その肌の白さが際立って僕の瞳に映る。女性にだって、ここまで透けるような肌の人はなかなかいな

いはずだ。

「しかし、すげえよな。オープンカーなんてさ」

僕は腰を沈めずに言った。こうして身を乗り出していた方が、周りの景色を遠くまで眺められて気持ちが悪かったのだ。すると僕は、僕の方をチラリと見た後で、たしなめるようにまた言った。

「運転には自信はある方ですけど、それでも何があるか分かりません。危険ですから座ってください」

「あのさあどこまで行くわけ？あれからかなり走っているぜ」

と、今度は手元にあるラジオをいじりながらきく。何かをして気を紛らわせなければ、落ち着かない性格なのだ。

ザザザ・・・ザ・・・ザ・・・

数秒電波がつかまらずノイズがはしる。が、すぐに女の人の深刻そうな声が、スピーカーから聞こえてきた。ニュースだ。

「ラジオ、好きですか？」

彼はにべもなく言った。

「別に。暇だったからいじっていただけだよ。ニュースも偶然だ」

「そうですか」

そして二人の淡々とした会話をフォローするかのようにな、ニュースは続いた。

『それでは次のニュースです。今朝八時頃、女性のものと思われる変死体が発見されました・・・』

バックミラーに映っている彼の眉毛が、ピクリと動く。

『なお警察では、この事件を一連の連続殺人事件と同一の犯行と見て犯人の行方を追っているもようです・・・それでは次に・・・』

「連続殺人事件かあ、怖いよな」

と、僕はあごをしゃくった。隣からの返事はなかった。

そればかりか、彼の横顔はさっきまでとは違ってかわりこわばって見える。何を考えているかは分からないが、逆にそれが怖くてこれ以上は声をかけられなかった。

ところで、何故僕がこんな始めて会った謎だらけな男の車の中でくつろいでいるのかというと、そうなるまでの課程には一見単純で、しかし僕にとっては、ものすごく重要な理由があった。最終的にはそれが僕の背中を押したのだが。

とにかくそれを説明するには、今から三十分前まで時間を逆のぼらなければならぬ。そう、彼が無謀にも赤信号の交差点を渡り終えたあの時まで。

「お迎えにありがとうございましたよ。酉那忍さん」

僕は、口をポカンと開けたまま彼を見つめた。迎えに来た？何のことだ？何故僕の名前を知っているんだ？尽きない疑問に、僕の頭の中はゴチャゴチャになっていた。けれど男は、何のおかまいもなしに僕の手をとったかと思うと、「行きましよう。時間がありません」

と言って歩き始めようとする。僕はその手を強引に振りほどき、続いて彼のむなぐらをつかんで引いた。

「いきなり何だよ。誰だよお前！」

いきり立つ僕を、その涼しげな瞳に映しながら、男はさりりと言った。

「私の名前は須貝流と言います。よろしく」

僕は手を放さなかった。そればかりか、すきさえあれば殴り倒そうとさえ考えていたくらいだ。

「どうして僕の名前を知っている」

「ここ数日間、あなたを調べさせていただきました」

「何だと！」

それを聞いた時、既に僕の右手は顔面めがけて突き抜かれていた。けれどそれが、わずかでも狙った部分に触れることはなかった。彼は瞬き一つ見せずに、僕に空を切らせたのだった。

「ここで詳しい話は出来ません。とりあえず私について来てくれませんか？借りていいですよ。雨宇詩鈴菜さん？」

切れた。何でそうなったかは分からないが、とにかく説明も出来ない程の怒りが、一気に燃えあがった。

「貴様！こいつまで調べたのか！」

再び右拳を振りあげる。結果は同じだった。男はそれを余裕でかわし、気がつくと一差し指を僕の頬に突き付けていた。僕の頬に冷たい汗が流れる。力の差は歴然としていた。

「あなたと戦うためにここへ来たのではありません。話をするためにここへ来たのです。さあ、行きましよう車を近くに止めてあるので」

そう言うと、彼は、静かに手を差し出した。わけの分からないことをべらべらと並べやがって。心底腹の立つ奴だ。

僕がその手に触れることはなかった。

しかし、

「まったく、付き合っちゃいられないぜ！」

と彼に背中を向けて歩きだそうとした。その時だった。

「忍さん。あなたは最近、奇妙な夢を見るはずです」

一刹那、その一言に僕の心臓は驚掴みされたようだった。

ジクリとした痛みが全身に広がり、足を止める。

「その謎も解いて差し上げますよ」

彼は透き通るような声で付け足した。

「何故・・・それを？」

消え入りそうな声で、僕は言った。信じられないことに、振り向くことも、そして前へ進むことも出来なくなっていた。流と名乗る男が口にした『夢』という単語は、僕の手足に錠をかうに十分な効果を持っていたということだ。僕は歯を食いしばった。握りしめた両拳は汗ばみ、震えていた。唇をかみ、きつく瞼をとじた。

「忍さん」

流の声に、肩がピクンとはねる。

「どうしても、ここで話すわけにはいかないのです。私の車へ来てください。会わせたい人もいるので」

彼が話し終わるのを確認して、僕はゆっくりと瞼を持ちあげ、少し間をあけた後で、

「分かった。行くよ」

・・・と、いうわけだ。

まあ簡単に言ってしまうえば僕は、『夢』という名の餌に釣りあげられた魚みたいなものだ。情けない話だが、それについて知るためだけに、わざわざこの車に乗ったと言っても過言ではないのである。何故なのか、本当に何故なのか、僕は、あの奇妙な夢に背中を押されていた。しかし、彼は車に乗っているその間、そのことについては何一つ話してはくれなかった。おそらく、全ては彼の言う、会わせたい人がいる場所へたどり着いてからというわけなのだろう。別にそれはそれでいい。それでいいのだが。

「おい」

「何ですか」

「何か、こう、雑談も出来ないのか。くだらない無駄話でいいからさ」

それを聞くと彼は、にべもなく言った。

「もう着きましたけど」

「へ？」

驚いて辺りを見回し、初めて車が止まっていることに気がついた。いつの間にと、もう一度注意深く見回す。今、僕らがいるのは海沿いの太い車道ではなく、冷やかな空気の漂う森林の中だった。それ以外のものと言ったら唯一、目の前に見えるプレハブのような小さな建物くらいだ。

「そろそろ降りたらどうです？忍さん」

「忍でいいよ。僕もあんたを呼び捨てで呼ぶから」

そう言う僕と僕は、助手席から外へと飛び降りた。彼がこれから僕をどこへ連れて行くかとして知っているかは言わずと知れたことだった。何せ、建物が一つしかないのだから当然だ。

「まるで廃墟だな」

そこは僕が口にしたとおりの場所だった。どこもかしこも、ほとんど元の色が見えない程、茶色く錆びていて、幾つかある窓にもペンキらしきものがとんでいたり、もしくは割れていたりしている。とてもじゃないがここに人が住んでいるとは思えない。けれど、周囲の手入れだけは誰がしたものかたいしたものだ。伸びきった雑草はまるでなく、ゴミ一つ落ちちゃいない。僕は目だけをキョロキョロさせ、様子をうかがった。

「何をしているのですか？行きますよ」

流が僕の背中を押して、

「あそこに私たちの仲間がいるんです」

と真剣な顔付きで言った。『たち』ということは僕の仲間でもあるらしい。まったくもってわけが分からなくなってきたが、とりあえず頷く。どちらにしろ、あの部屋に入れば全てが分かることだ。しかし、そう思ってドアのノブを引いたとたん、中から悲鳴にも似た奇声がとび出し、僕は反射的に耳をふさいだ。

「な、何だ。この金切り声は！」

予想もしていなかった事態に当惑して、僕は言った。

「仲間のカムヤですよ」

平然と彼は言った。

「この声が始り前のことのように言っな」

「当たり前ですから」

その言葉の意味に不安を隠せず、僕は開きかけたドアを間に立ちすくんだ。まるで、パンドラの箱を目前にしているようだ。

「そんな所で立ち止まってないで、中に入ったらどうです？」

「あ、ああ」

喉が鳴るだけ唾を飲み込み、恐る恐るドアを開ける。部屋の中には僕と流を含めて、五人の男女がいた。一人は女性で、何の仕事だろうか、隅で熱心にパソコンをうっている。彼女は別にいい。何の問題もなさそうな人だ。問題は、あと二人だ。僕は素知らぬ顔で、右はじに座っている男へ視線を向けた。二十代後半か、そろそろ、三十代に入る頃だろう、いや、あのあごの無精髭を剃ればもつと若く見られるかもしれない。歳を感じさせない、金の短髪男だ。彼は白い壁を正面に、何やらブツブツと話し込むという、奇妙な行動をとっていた。それはまるで、彼にしか見えない誰かと、彼らにしか分からない言葉で会話をしているようにもとれる。ちなみに言ってしまうえば、さっきの奇声は彼が発したものだ。そして、もう一人。奥にある椅子に座っているのは、小学三、四年くらいのおかつぱの少年なのだが、彼もまた、とてもじゃないが尋常とは思えない目付きをしている。彼は小さな円卓上に広げられたパズルを、独り言を口にしながらかわらせていた。

僕は、何も言えずに、その場で立ち尽くした。そしてその沈黙を破ったのは、やはり流の声だった。

「みなさん。聞いてください」

彼は手を叩いて鳴らすと、僕の背中を押し、話を続けた。

「彼は今日から私たちの仲間になる、酉那忍さんです」

「ど、ども」

な、仲間ってなんだ？僕がこんなに奇人変人たちの仲間になるといふのか？何故？何のために？

「忍、一応紹介しておきましょう。今あそこでパソコンをうっているのは、伊万里ケイコといます。そしてそこで独り言を言って楽しんでるのは、さっきも紹介しました。白井カムヤ。最後に、パズルをしているのが高橋隆といえます。覚えましたね」

「覚えて何になるんだよ。僕は夢の話を聞いたらさっさと帰るぜ」

心底ここから早く脱出したかった。いつまでもこんな狂った奴らと一緒にいた

ら、なにをされるか分かったものじゃない。そう思って、僕が夢の話を切り出すと、

「忍ってどういうの？君」

さっきパソコンいじりをしていた女の人が、立ち上がり



言った。あらためて見ると、彼女が驚く程綺麗な顔だちをしていることに気づき、今更ながらドキマギしてしまう。

「えっと」

「ケイコよ一回で覚えてね」

「ああ、ケイコさん」

両手をパンツと叩いて頷く。彼女はうんざりした表情で、短いため息をいた。

「流、この子戦力になるの？」

ケイコさんは僕の隣に立つと、意味不明なことを言っ僕僕の肩に手を置いた。鈴菜に対する罪悪感をよそに、僕の鼓動が早鐘を打ち始めているのが分かる。

「戦力になるかどうかは分かりませんが、彼が必要なことは確かです」

流はかぶりを振って言った。話の内容を分かっていないのは、どうやら僕だけらしい。

「あの、僕の夢については」

おずおずと、二人の話に話って入ると、ケイコさんが笑って頷いた。

「忍、君、夢の中ではどういう気分だった？」

彼女は再びパソコンの置いてある席へ戻ると、細い脚を組んで言った。どう言っいいものか分からず、後ろに立つ流を見あげる。彼は、一度だけ小さく頷いた。

僕の見たこと、感じたことをそのまま自分の言葉で説明していいと言っているんだろう。

僕は、この一週間続いた、あの反吐の出るようないまましい夢について話始めた。その世界では、自分は外人で、言葉ではとても言い表せない程の狂気だということ。かわいらしい少女ベッキー、そしてがむしゃらに走り回りたくなるような、あの広い大地と、全てを包み込んでくれるような空のこと。全て始めて見る景色なはずなのに、何故かそこについてよく知っているという事。

別に、それを全て信じてもらおうとは思わなかった。僕が第三者だったら、多分信じきれなかったと思う。けれど、彼らは違った。まるでそれが常識であるかのよう、ごく自然な口調で話を進めた。

「夢の中の君の名前は？」

「という、流の質問だった。」

「・・・ヘンリー」

絞り出すように答えると、さっきまで沈黙を守っていたケイコさんが、狙ったように立ちあがり、僕を呼んだ。

「忍、君の見た夢は記憶よ」  
「記憶？」

僕は眉間にしわをよせた。

「その夢は、ヘンリーという人物の記憶なんですよ」

と、今度は横に立っている流が付け加えた。僕は唾を飲み込んだ。

「ど、どういう意味だよ」

「単刀直入に言います。ヘンリーとは忍、あなたの前世です。そして、あなたが毎晩見続けてきたあの悪夢は、彼が生きていた頃の記憶なんです」

「な……」

「……んだよそれ！と、言いかけた僕を、再び彼が制した。」

「あなたの中で、ヘンリーが覚醒しようとしています」

僕が悪夢について全てを知ったのは、それから十分以上も後のことだ。

しかし、それは不思議に一切の疑問を抱かせることなく、まるで自然の摂理のように、すんなりと理解出来た。実は、今まで見続けてきたあの悪夢は、僕の前世、ヘンリーの記憶であり、その彼が僕の中で目を覚ますようとしていること。そして、何と流を含む四人もまた、同じような悪夢によって悩まされた同士であること。僕はそれを聞いた時、文字どおり茫然自失の状態に陥ってしまった。けれどよくよく考えてみれば、なるほど、そうかもしれない、と頷けた。だいたい、そんな理由でもなければ、僕らが必然的に出会うはずがないのだ。全てを話し終えた流は、妙に疲れきった表情をしていた。僕は両手をシーンズのポケットに突っ込んだままで深くため息をついた。言葉を口にするには、僕もまた疲れすぎていたのだ。

「シヨック……でしたか？」

やけに弱々しい声で彼は言った。

「いや、別に。何故か納得したよ」

「そうですね。それじゃあ、少し付け足していいでしょうか？」まだあるのか。僕はもう一度、息を吐き出した。

「いいよ。ここまで来たら何を言われても驚かないと思うし」

それを聞くと、彼は少し表情を崩し、

「忍は、サイコパスというものを知っていますか？」

「いや」

「サイコパスとは、一般には精神病質者のことをさします。彼らは善悪の判断も、社会の常識も関係ありません。自分の思ったように行動し、その道を生き、自分勝手に欲しいものを手に入れ、後悔の念など一切持たず・・・言ってしまうば、あらゆる意味での残虐者です」

「それで？」

「あなたの前世、ヘンリーもまた、サイコパスだったはずですよ。ちなみに言ってしまうば、一緒にいた少女・・・えつと」

「ベッキーだよ」

「そう、ベッキーもまた、サイコパスだったのでしょ」

「結局何が言いたいんだよ、流」

彼の遠回しな言い方に苛立ちを感じながら、答えを探す。

「社会が変わっても、サイコパスは変わりません。この時代にも、数え切れない数の狂気が潜んでいることですよ」

「それで？」

「ここにいる私たち全員が、前世はそのサイコパスでした。そしてみんな、あなたと同じように悪夢にうなされました。しかし、覚醒が始まれば私たちもただですむはずがありません」

彼の言葉に、僕は強く頷いた。そのとおりだと思った。

僕らには、僕らの人格というものがあるのだ。それなのに、そこに他の人格まで混ぜてしまったら。考えただけでもゾツとする。

「一着の洋服に、無理やり二人も入ったら・・・」

「まずは裂けるでしょうね」

彼はきっぱりと言い、

「もしも、そうなら、今のカムヤや隆のように壊れるか、あるいは・・・」

と、その先にいるケイコさんへ視線を移して、こうつけ加えた。

「彼女のように二重人格になるか・・・で、しょうね」

「ちよっ、ちよっと待てよ。何だよ二重人格って！」

僕は、僕に笑いかけてくれている彼女を食い入るように見つめた。一体、彼女のどこが二重人格だというのだ？しかし、その疑問も長くは続かなかった。僕の瞳に映っていた彼女は、瞬きというほんのわずかな境に、言葉を忘れる程の変貌を遂げていた。変形がはっきりと変わったわけ

はない。しかし、彼女が僕の知る伊万里ケイコではないという事だけは、確かだった。目付きだ。そう、さっきまでの彼女とは目付きが全く違ってしているのだ。何ていうか、今の彼女の瞳からは、さっきまであった知的な輝きは失われ、代わりに野獣のような汚らしい姿が見え隠れしていた。「な……」

僕はヨロヨロと首をねじ曲げ、流を見た。

「忍、紹介しましょう。もう一人のケイコ、名前はチャールズ・ハツチャーと言います」

そんなこと言われても……と、僕は引きつり笑いを見せた。こんな時にどんな顔をすればいいかなんて、分かるはずがない。

「チャールズは、ケイコの前世なんですよ。彼女の場合、彼の覚醒で精神が分裂して、このように二重人格になってしまったのです」

「ケイコさんは、覚醒しちゃってたんだ」

「ええ。まだ完全ではありませんが」

「ふ、ふーん。二重人格ねえ、本当にあるんだあ……つて、ちょっと待てよ？じゃお前はどうなってるんだよ。他のみんなは……その、普通じゃないのに。ひよっとしてお前も彼女と同じ？」

「覚醒と言っても、人それぞれなんですよ。現世の意識よりも前世の常識の方が強かったりすれば、精神破壊を起こして、隆やカムヤのように各々の前世の意識が同じ強さだったりしたらこのように精神分裂を起こして、二重人格が出来あがります。そして私のように現世の意識が極端に強いと、サイコパスという能力のみが覚醒してしまうこともあります。つまり、覚醒の程度もその人物の意識の強さ次第というわけです。まあしかし、本来正常な働きをしている所へ異物が入り込んでただですむはずがありません。結局全員を待っているのは……死、です」

「それじゃあ」

僕は声を奮い立たせて言った。

「それじゃあきくけど、僕が覚醒して死ぬまでの間、僕はお前のように普通に生活出来るのか？それとも他のみんなみたいに、おかしくなってしまうのか」

流は一瞬眉をピクリと動かし、あごをしゃくった。だが、答えは一向に返ってこない。

「どうなるんだよ」

彼は動きをピタリと止め、のぞき込むような目付きで

こつちを睨んだ。僕は永遠にも感じられる沈黙を、ひたすら固唾を呑んで耐えた。

と、彼がようやく口を割った。

「おそろく、これはあくまで私の推測でしかないのですが」

「ああ」

「あなた自身に意識は潰されるでしょう。前世の意識、ヘンリーによって」

覚悟はしていたが、実際言われてみるとかなり辛いものだ。僕は二度とない絶望感に唇をきつく噛んだ。

「そうならないためには、方法が一つしかありません」と彼は付け加えるように言った。

「何！」

勢いよく顔をあげる。

「しかし、逆にそれで命を落とす可能性もある」

流とは違う声に、僕の肩がビクリとはねる。チャールズだ。

「命が惜しかったら、覚醒がつましくくことを祈るんだな」美人な彼は男らしく言った。

「そんな、チャールズ、彼は一番の戦力になってくれるかもしれないよ。それに、彼を見つけたのはケイコじゃないですか。忍がサイコパスでなかったら、彼女は彼を見つけることなんて出来なかったはずです」妙に早口で、流が割って入る。

チャールズは小指の先を耳穴に突っ込むと、ほじり、抜いて、彼に向かって吹いた。

「まあな。サイコパスは共に引かれ合っている特徴がなければ、このガキを発見は出来なかっただろう。それに、ここへ来たのも宿命だと俺も思う。過去と現在、前世と今のな。しかし、だからってこんな奴を認めるわけにはいかない」

一体、この会話は何だというのだ？戦力？宿命？そのうえ下手したら命を落としかねないって・・・どういうつもりで流は僕をここへ連れて来たんだ？

「おい忍」

親父のような口調で、チャールズが呼んだ。僕は無言で、振り向いた。

「悪いことは言わねえ。すぐにここから立ち去れ。ここであったことは忘れてな」

「な、何を・・・」

流がそれを遮ろうとしたが、無理だった。

「覚醒がうまくいくのを信じて帰れ」

そんな彼の態度に力チンときた僕は、憤然と彼のえりもとをむしり取るように引き、

「今すぐにもそうしたいさ。けど、ここまで話を聞かせておいて、今更全てを忘れて帰れだなんて、あまりにも勝手過ぎるんじゃないか？」

何てこと出来るはずもまく、なるべく控えめに、

「せめて話だけでも聞かせてよ。何が、僕の覚醒を止めることの出来る唯一の方法なのか？」

ときいた。

答えは、すぐには返ってこなかった。流は再びあごをしゃくりだし、チャールズは口答えされたのをむかっているのか、こっちをジツと睨みつけている。

答える気がないのなら、無理やりにもきき出してやる。と、口を開きかけた時、それよりも早くチャールズが言った。

「人殺し・・・さ」

カラリと乾いた風が吹き、潮の香りを嗅いだ。

防波堤から眺める海は、一本の線を境に空とつながっているように見える。僕は鈴菜を横目に力いっぱい伸びた。

「どうしたの、忍。さっきから口数少ないよ」

防波堤によりかかっている鈴菜が言った。胸に With Out と文字った白のTシャツを着て、下はデニムのショートパンツという少年のようないでたちだ。僕は少し笑うと、鼻をすすった。

「昨日ごめんな。デート途中ですっぱかしちゃって」

彼女はうつむきがちにかぶりを振った。けれどそれとは裏腹に、いじけていることがその表情からもあり分かった。無理もない。僕が約束の場所へ現れるまで、今日みたいな日差しの下で、帰らずにずっと待っていてくれたのに、やっこのこと会えたと思っただけに「さよなら」だったのだから・・・

「それにしても・・・」

切り出したのは鈴菜の方だった。

「このファイアット・バルケッタ、どうしたの？」

目の前に止めてある流線形の赤いオープンカーのことである。

「昨日の長髪男から借りた」

「借りたの？昨日の人から？」

「ああ、今日返しに行くけどね」

「ふうん」

そう言った後も鈴菜は何やら口の中でモゴモゴと言っていたが、僕にはよく聞きとれなかった。ただ、何を言おうとしているかは何となくではあるが分かっていった。多分、昨日僕が流という男と、何があつたのかということが聞きたいのだろう。けれど説明擦る気は毛頭なかった。話したところでとても信じてもらえらると思えないし、例え信じてもらつたとしてもそれはそれで困る。あれから僕が家へたどり着いたのは、相当遅くなつてからのことだつた。倉庫から出た時はまだ明るかつたのだが、そのまま家に帰る気のもなれず、このオープンカーでそこら中を流しまくつていたので。流たちから突然聞かされた驚くべき事実とその解決策に脳みそがおつつかなくなつてしまつてとつた、一時的な現実逃避というわけだ。そして今日の約束は、僕の留守番電話と彼女がしていたものだつた。あつちから連絡がなければ、僕から約束をしようと思つていたので、ちょうどよかつた。

「海・・・」

「ん？」

「またもや鈴菜に先をこされた。

「綺麗だね」

「・・・そうだな」

カモメが風をうけて飛び飛行機雲が線を引いている。海岸では海水浴に来た人たちが喜々としてはしゃいでいた。確かに彼女の言う通り、それは心洗われるような眺めだつた。けれど・・・と素知らぬ顔で鈴菜の横顔を見て、そして思つた。

（お前の方がよっぽど綺麗だ）

思わず口からこぼれそうになつた言葉を、ゴクリと飲み込む。

「鈴菜？」

そして情けなくもかすれた声で僕は言った。

「喉渴かないか？今なんか買って来るからさ、そこで待つてろよ」

彼女は無言で頷き、柔らかな笑顔を作つて僕を見送つてくれた。自動販売機はすぐそこにある。僕は車のほとんど通らない車道を横断し、そこまで駆け寄つた。財布をとり出し、手を止める。

「おい。何飲む？」

と鈴菜を呼ぶと、彼女の口が、ゆっくり「コ・オ・ラ」と動き、僕は頷いた。

「コーラ二本だな」

そして、ガコンという音と共に出て来た缶をとり出そうとして、しゃがみこんだ。その時だった。

突然、昨日もう一人のケイコさん、チャールズ・ハッチャーが言っていた『人殺し』という言葉が僕の脳裏をフツとかすめてとおっていった。

「え？」

予期せぬチャールズの一言に面食らった僕は、ただそこに立ち尽くすしかなかった。でも決してそれは、聞き違いなんかじゃない。確かに彼は、『人殺し』。そう言ったのだ。

「それでもお前はやるというのか？」

と彼は低い声で、きいた。

「・・・」

ことの大きさに思い浮かぶ言葉もなく、横に立つ流をチラリと見やると、彼もちょうどそうしたところで目が合った。さっきよりもっと深刻な顔つきだ。この表情を見ただけでも、チャールズの言葉が嘘じゃないくらい、十分すぎるくらい分かる。

「人殺しは罪だ。それくらいガキのお前だって分かるだろうが」

「それは・・・」

喉に蓋をされたように息苦しい。僕はうつむいた。

「さっさと帰れ。お前には無理なんだよ」

そして付け足すように流も言った。

「確かに私達がこれからしようとしていることは人殺しです。しかしさっきも言ったように、それをやらなければ、私たちの命が危ないのです」

「自分の命を守るためなら、何をやってもいいのかよ」

絞り出すように、僕は言った。

「確かに、あなたの言うとおり殺人は重罪です。でも、聞いてください。人はそれぞれ、必ず前世を持っているものです。けれど、通常であれば現世の人間はそれに気がつくことなく一生を終えてしまします。しかしどういっわけか、私たちはそれを思い出しかけている。私たちの前世が、再



び現代に甦ろうとしているのです」

「知っているよ。だから何だっというんだよ」

「だったらその理由は何でしょう？」

「何？」

「なぜ、私達の中で『彼ら』が目編めようとしているのでしょうか」

そんなこと考えもしなかった。けれど言われて見ればそのとおりだ。ことが起こるには、いつもそれなりの理由というものがちゃんと存在するものであり、だから多分、僕らの覚醒についてだって同じことが言えるはずである。

そして彼が濡れた唇を開いて、その答えを口にしようとした時だった。

「俺たちは同一の目的を、復讐という名の呪いを抱いて覚醒したのさ。ただ、

一人の男に対して・・・な」

割って入ったのはケイコさん・・・いや、チャールズだった。

「理由は違っても、俺たちは全員、前世の世界で同じ人物に恨みを持っていたのさ」

「つまり？」

込みあげようとする何かを押さえながら、僕は彼の答えを促した。

彼はわずかな沈黙の後、低く言った。

「俺たちが覚醒した理由・目的。それは俺たちと同じようにどこかで覚醒して

いる、その男を殺ることだ。罪なんて関係あるか。俺たちは・・・やらないかな

らない」

「そんな・・・」

僕は目をむいた。話の途中から予想していた答え、そのままだったのだが。それじゃあ、そうなる・・・あんまりだ。

「けどそれは前世の罪だろ？今の人には全く関係ないことじゃないか？」思ったとおりのことを、僕は言った。当然だ。前世がどうだったかで殺されてたまるかっていうんだ。しかし、彼らには僕の言いたいことがまるで分かっていないようだった。流はあごをしゃくつたままで僕を見つめ、チャールズといえは呆れたと言った顔でかぶりを振っている。

僕は僕で、「何怒ってるんだよ。当然のこと言っただけ

じゃないか。こんちくしょう！」何てことを口に出来るはずもなく、ただただ石と化していた。

そして、先に口を開いたのはチャールズだった。

「驚いたな」

と、にべもなく言ったのだった。

「そんなことを口にするところを見ると、ほとんど覚醒してないんじゃないか」

「ええ」

と流も言った。

「ですから、よけいに戦力になってほしいですよ忍にはね。彼はきつと一番の戦力に……」

「駄目だ」

言いかけた流を、やっぱりチャールズが遮った。

「常識があるのならなおさらだ。おい忍、お前はやっぱり帰れ。足を引つ張るだけだ」

「でも……痛つてええ！」

チャールズが力いっぱいひねって自分の顔の方へ寄せた。やっつても間抜けなのに、表情がそれとは裏腹に真面目なので、この状況はさおかし大間抜けに見えることだろう。

しかしそれにもかまわず、彼は唾を飛ばして言った。

「駄目だと言ったら駄目だ。さっさと帰れいいな、いいな！？」

それはほとんど脅しに近いものだった。

「……のぶ？ねえ忍つてば」

鈴菜の声でハツと我に返り、声のした方を見あげる。しゃがみこんでいる僕を、後ろから見下ろす形で彼女が立っていた。

「何やっているの？ずっと座り込んだままでさ」

「な、何でもないよ」

「なあんか今日の忍は変だな」

仏頂面で僕の袖を引つ張りながら、彼女は一言もらした。「他の女だ」それを聞いてガクリときた。どこをどう解釈すればそんな答えにたどり着けるか、一度こいつの頭をかち割つて中身を見てみたいものだ。

「くっそめ。どこの女あ！」

さほど悔しそつのも聞こえない口調で、鈴菜が言った。

「違うよ。女じゃないってば」

けれど彼女の仏頂面はかわる事なく僕に向いている。

まったく・・・この馬鹿たれは！と長いため息の後、

「あのなあ、僕が浮気するはずないだろ。そんなことお前が一分分かつているじゃないか？」

鈴菜は口を尖らせた。

「じゃあ」

「ん？」

「じゃああたしのこと好き？」

「ん・・・そりゃ・・・ね」

と、なんとかはぐらかす。そんなこと、恥ずかしくて、とてもじゃないが真面目に答えられない。

「あいまいだな」

つまらなそうな声で彼女は言った。

「あたしはだああいすきだよ、忍！」

「こ、こら！鈴菜！」

背中から抱きついて離れようとしない鈴菜を引きずりながら、やっとのことで防波堤へたどり着いた僕は、何とか彼女を引っ剥がすとそのうえに飛びのった。足元が太陽の熱を吸い込んだコンクリートのせいで少し熱い。

「落ちてもしらないよ」

鈴菜がクスクス笑いながら僕を見あげている。

「平気さ。下はすぐ砂浜だ」

「そっだね」

そう言っつて鈴菜が潤む瞳を細めるのを見た時、僕の心臓は一度だけ大きく鳴った。子鹿のようなその瞳は、他の何よりも、どんなものよりも愛しく感じられた。許されるなら、この場で壊れる程何度も抱き締めて、そして剥製にでもして永遠に自分の部屋に置いておきたいくらいだった。

しかし、と、思う。もしも僕が、結局サイコパスとして覚醒してしまつたら、しかもそれが流の言つとおり、前世の意識の方が強かつたりしたら・・・新しい僕は、その命が尽きるまでの間、この愛しい彼女に何も手出ししないでくれるだろうか。おそらく無理だろう。いや、確実に不可能なことだ。僕は絶対に彼女をこの手で殺してしまふ。そう、夢に出た女の人のように。それだけは嫌だ。鈴菜を傷つけるのだけは、たとえ神様に嫌われようともしたくない。そう考えると、僕は無意識のうちに二つの拳を握っていた。

「なあ鈴菜」

「ん？」

「もし僕が、何かで変わってしまったって、僕を好きでいられる？」

「それが忍なら。ずうっと好きだよ」

この柔らかな笑顔を、絶対に傷つけない。ずっと、西那忍として彼女のそばにいたい。彼女を決して悲しませたりはしない！そう考えると、僕がこれから何をすべきか、それはもう決まっているようなものだった。とたんに、今まで曇っていた心が、嘘のように晴れやかになり、軽くなった気がした。

「鈴菜」

僕の呼びかけに、ほお杖をしている彼女が再び顔をあげる。気温とは関係なく、体温が何度か上昇していくようだ。

僕は息を大きく吸い込み、吐き出すそれと一緒にさりげなく言った。

「僕も、お前が好きだよ」

日は沈みかけていた。

赤々とした空が、何だか燃えているようにも見える。僕は流から借りていた車を、倉庫の前へ止めるなり、エンジンを切って地面へ降り立った。

今の僕には、断固たる決心があった。もう誰にも止められないという程の絶対的なものだ。辺りは、静まり返っていた。時折、カラスか何かが飛ぶような音は聞こえたが、人の気配らしきものは何もない。僕が、力いっぱい倉庫のドアに蹴りを入れると、それはけたたましい音と共に開き、中にいる流たち全員を振り向かせた。

「てめえは」

驚いた顔でチャールズが言った。

「忍」

流の表情は、ほんの少し優しく感じられた。

「僕もやるよ。もう決めたんだ」

『本名、ヘンリー・リース・ルーカス。売春婦だった母から、幼い頃よりサディスティックな虐待を受け、父親は彼が十三の時に肺炎で死亡。そして彼は十四の時、十七歳の少女を強姦し殺害した。これが彼にとつての始めての殺人ということになる。そして、次の犠牲者はヘンリーの母親。』

彼は彼女の喉元をナイフで裂き、殺害。四十年の刑でミシガン州立刑務所に収監された。この間、分裂症状と自殺未遂を繰り返し、精神病院に移送される。しかし彼は、出獄したその日から殺人を再開。その後七年にわたり三百人以上を殺害した。また、彼は四十でベッキーという少女に出会う。彼はベッキーにあふれんばかりの愛着を覚えた。後に、二人は殺人旅行へと旅立つ。そしていつしか彼らは夫婦として暮らすようになった。が、別れはすぐに訪れた。ベッキーがある男に理由もなく殺害されたのだ。その男の名は、エド・ゲイン」

ケイコさんのコンピュータが映し出した画面は、そこで終わっていた。しかしそれは、僕にとつて十分すぎる程の情報だった。僕は彼女の肩こしから顔をのぞかせながら、両目をしばたき、この画面からおおよそのことを理解すると、やっとなんげと胸を撫で下ろすことが出来た。つまり、話をもっと簡単にするとこういうことだ。僕の前世であるヘンリーは、凶悪な殺人者であり、夢の中でいつも一緒にいたベッキーは、未来の僕の奥さんになる人物だったのだ。そして、これは僕の推測でしかないのだが、彼は殺された彼女の敵をとるために覚醒しようとしているのではないだろうか。

「理解、出来ましたか？」

もう一つの椅子に腰かけながら流が言った。

「まあね。あれだろ。全員このエド・ゲインとかいう奴に対する復讐で覚醒しかかっているんだろ？」

彼は頷いた。

「みんな、あなたと似たような恨みを持っている者たちです。勿論、私もね」

「そういうこと。目的は一つよ」

ボロボロのジーンズに、白のTシャツというラフないでたちのケイコさんが言った。こんな格好でも、美人はものすごく様になるものだとつくづく思う。本当、子供っぽい鈴菜とは正反対のタイプだ。ただ、一つだけ強がりをお互いさせてもらえ

ば、鈴菜がケイコさんみたくなれないように、ケイコさんもまた、鈴菜のようにはなれないということだ。まあそんなことはどうでもいいことだけど。気をとり直して僕は、腕を組んだまま突っ立っている流にきいた。

「エド・ゲインの現世は誰か分かっているのか？」

「はい」

彼の即答で、一瞬言葉に詰まる。

「誰？」

しかし次の質問にそれはなかった。一刹那、流の表情にはためらいの色が生じ、僕もそれを見逃しはしなかった。

「言えよ」

低い声で答えを促す。だが、彼だけならまだしも、目の前にいるケイコさんまでもが黙りこくってしまつて僕の質問に答えようとはしてくれない。何がそんなに彼らをためらわせているのだろうか。と、そう思った時だった。

「忍は、最近話題になつてゐる連続殺人事件について知つていますか？」

沈黙を守つていた流が、不意をつくように口を開いた。

僕は無言で頷いた。彼の言つてゐる『連続殺人事件』とは、そりやあもう言葉では言い表せない程の残虐性を持つたものらしく、最近では毎日のようにニュースやワイドショーに登場してくるくらいだった。

「その殺人事件の犯人が、おそらく、エド・ゲインではないかと。いえ、確実に彼でしょう」

「そうだという証拠でもあるのか」

「はい。殺しの手口が、彼と同様のものであることと、もう一つはこれだけの人間を殺害しても証拠一つすらつかませないこと。サイコパス特有の手口と高知能な行動がそれを照明しています」

「つまり、僕らはこの犯人を見つけ出して殺せばいいとっ」

「そうです。犯人を殺したと同時に、ここにゐる全員の呪縛が解かれるはずですよ」

殺人という言葉に後込みしながらも、僕はどこか胸を撫で下ろしている所があつた。それは多分、エド・ゲインが前世とかわらず、現世も凶悪犯罪者だと分かつたからだと思つ。これが今では善良な一市民だとしたら、きつと罪の意識に押しつぶされて違くない。けれどふと考えてみる。罪のない者の命は重く、罪深き者の命はそれを狩ろうとする者にも、さほど罪悪感を抱かせず、そればかりか微かな誇りさえ持たせてしまふ程奇妙な軽さがある。それならば、それを持つた僕らもまた、罪深き者になつて、この命もごみのように軽いものにかわつてしまふのだろうか。しかたのないことだけど、正直、かなりつらい。

「忍」

流が僕の肩に手を置いた。

「次はエド・ゲインについてですが教えておいてあげましょ

う」

僕は頷いた。

彼は一度、小さな咳払いの様なものをすると、今度はエド・ゲインについて説明し始めた。

「本名はエド・ゲイン。ウィスコンシンシユウ州のバーで一人の女性を射殺。またある金物店では中年の女主人を殺害。死体は両方とも自宅へ運び、それを使って皮膚で出来た太鼓や衣服、頭蓋骨で石鱈皿などを制作。他にも窓際に唇を飾ったり、壁には本物のデスマスクを飾っていたそうです。キツチンにはグラスに四つの鼻、レンジの上のフライパンには心臓も見つかっています。他には……」

「もういいよ。もうたくさんだ」

僕はまだ話を続けようとしている流を、吐き捨てるような言葉で遮った。

「気持ち悪い。何だよそれ。殺人とか……そついう……それ以前に人間じゃないんじゃないの？」

「うんざりしている僕を、彼はキョトンとした顔で見つめ、それでは質問しますけど」

と言った。

「あなたは、釣りあげた魚を食べるために、いえ、何も魚に限ったことではないのですが、とにかく、何かしら手を加えなければならぬような食べ物があった時……迷わず調理しますよね」

「ああ」

難無く頷く。

「それと同じことですよ。ただそれが……人間という名の材料にかわっただけの話でね」

瞬間、僕は脊髄に電流が走るような不快感を感じ、そうかと思うと次には体中に鳥肌を立てていた。心底、恐怖というものを感じたのだ。流は……彼は、この集団の中で比較的僕に近い位置にいるのかと思っていた。カムヤヤ隆は全く違う次元の人種だし、ケイコさんもまた、二重人格という特別な人間だった。けれど、この須貝流という男はそんな非人間的特徴も見られず、だから余計に彼を自分に近い者だと思い込んでいた。しかし今になってようやく気がついた。全て僕の勘違いだったのだ。流が与えた芯からくる恐怖。これは彼が一刹那、僕に見せた恍惚の表情にあった。何を思っただろうか？ 分らないが、その中には確かにサイコパスを象徴するものがあった。言っただけならば（僕以外の）ここに居る奴ら全員が殺人鬼エド・ゲ

インと何等変わらないということだ。ただ一つ、まだ殺しをしていないということを除けば。

「忍？」

そして、いつも涼しい表情で彼が言った。

「戦いはもう既に始まっています。油断しないでくださいね」

「わかっているよ。でもそれはここにいる全員に言えることだぜ？」

僕らの中で最年少だった高橋隆が殺されたのは、それから数日後のことだ。正確に言うところ殺されたかどうかは定かではないのだが、行方不明になってしまった以上、そう考える方が妥当だろうとのことだった。勿論、そう言ったのは流だ。

これは後で彼から聞いた話なのだが、どうやら高橋隆という少年は、もともとはどこかの大きな精神病院に入っていて、そこからこの倉庫に行き来していたらしかった。そんな彼の死は、僕らの中にわずかでも波風を立てることはなかった。意外にも、この僕でさえ動揺はしなかった程だ。今度は、ケイコさんの入れてくれたコーヒーを飲みながら、流と話し込んでいる。内容はこれからの対策についてだ。彼はいつものように愛用のパイプ椅子に座りながら、テーブルを挟んで正面に座っている僕を見ながら言った。

「エド・ゲインはどこからか私たちを観察しているはずですよ。そうでなければ、隆をこつとも簡単に殺せるはずがありません」

僕はカップをテーブルに置いた。

「この中にスパイでもいると？」

彼はかぶりを振った。

「そうは言っていません。ただ、話がうますぎるような気がして」

「私もそう思うわ」

パソコンをいじっている手を止めてケイコさんも言う。

流の視線が動いた。

「エド・ゲインは、強敵です」

「今も昔もね」

そう言っただけ彼女はフツと笑い、ゆっくり立ちあがると、

何とも説明のしようのない奇妙な表情を見せてボソリと呟



いた。  
「それにしても、カムヤはどこまで買い物に行ったのかしら」

### 真夏の快晴。

まるで太陽を背負っているような気がしてくる程クソ暑い日だった。こんな日は愛用のナイフで体の皮や肉、内蔵をとり出して骨だけになってしまいたいとカムヤは考えていた。

「アツイ・・・ナ」

彼は既に二時間近くもの間、この商店街を目的もなくウロウロと徘徊していた。倉庫を出て来た時は確かに目的があったのだが、それも今となってはもうどうでもよくなつてしまったのだ。彼は新しいサバイバルナイフを手に入れたかった。しかし、気に入った物がどの店にも置いてなく、とうとう買うのを断念したのだった。白井カムヤは、母親が日本人で父親がフランス人とぞくに言うハーフだった。そのため、彼はいつも周りの人間たちはどこか特別扱いされてきた。それは、カムヤにとってはいじめにもとれる程のつらいものだった。見られることを肌で感じ、噂されることを心から恐れ、過敏になりすぎた神経は徐々に擦り減つていくようだった。そんなある日のこと、彼は不思議な人物と出会った。場所は夢の中で、妙に懐かしく感じる。しかもその人物とは、自分自身であつて、しかし他人だった。彼の名前はエドモンド・ミル・ケンパー。筋金入りの凶悪殺人犯だ。

カムヤは目を追うことに、この殺人犯にのめり込んでいった。そして彼がサイコパスとして目覚めたのが、十四歳の時だった。こともあろうに彼は、たった一人しかいなかった親友を殺害してしまった。後悔なんてものは一切抱かなかつた。そればかりか、その日は歡喜の表情を顔に張り付けたままで眠れる程、それは喜ばしいことだった。親友は行方不明として捜査が進められたが、カムヤが疑われることはなかつた。そればかりか、周囲から同情される程、彼は自分を作る天才だった。大人たちの前で大切な親友のために号泣し、自分も、さも被害者のように振る舞っていたのだ。誰もが彼の前ではまるで操り人形のようにだった。結局、その事件は証拠の一つもあげられないまま迷宮入り

となつて終わつてしまつた。

カムヤは夢の中で、芸術にも似た、エドモンドの殺しの手口を何度も観察し、それを実行に移したのだから、証拠が出ないのも当然のことだ。しかしこの事件が迷宮入りとなつた最大の理由は、少年カムヤのとつた大胆極まりない行動にあつた。信じられないことに、彼は親友の死体を調理し、何日にも分けて食していたのだ。しかも骨は様々な方法で粉にし、何も知らない家族にまで口にさせていた。彼は、自分だけが知っているという喜びに酔つていた。

「シカシ、アツイナ」

カムヤは額から伝う汗を右手で拭くと、足を止めた。信号が赤に変わったのだ。

「シンゴウハ、キライダ」

信号が青に変わるまでおよそ五分待つて、彼は再び前へ踏み出した。その交差点は、かつて僕、酉那忍と須貝流が初めて出会つた場所だつた。そろそろと足並みをそろえ、白の縞を渡る群衆の中にはカムイの姿もあつた。むかいからも、同じような数の人波が押し寄せ、交わり、それぞれがそれぞれの間をぬつて先を急いで行く。そしてカムヤがちようど、交差点の中央より少し前へ差しかつた時だつた。自分の胸のあたりから「すみません」という、か細い声が聞こえて彼は足を止めた。

「ダレダ？」

眉を寄せながらカムヤは言つた。少年は「コリともせず、カムヤの顔を見あげている。透けるよう白い肌や、長い眉とまつげはまるで無垢な少女を連想させる。少年の濡れた唇は言つた。

「白井カムヤさんですよね」

カムヤは頷こうとした。次の瞬間、彼は腹部に激しい痛みを感じ、歯を食いしばつた。頭の奥底で、何かがプツリと切れようとするのを何とか堪え、下を見る。息を飲んだ。痛みの原因は、腹に根元までブスリと刺さつているナイフだつた。

「ア・・・ゲウ？」

足の先から力が抜け、彼は少年に多いかぶさるよりに倒れかかつて臉をきつくとじた。

「痛い、ですか？」

笑いをかみ殺して、少年は言つた。

「オ・・・マ、エ・・・マサ・・・力」

傷口を押さえている右手の指の間からは熱い血が流れ出

している。カムヤは浅くなり始めた呼吸を何とか整え、唇を噛み締めた。

「これだけの人がいるんだから、一人くらい死んでも誰も気づかないでしょう」

耳元からは、少年の無邪気な笑い声が静かに聞こえてくる。息はしだいに冷たくなり、魂は体温と一緒に足元から抜けて行くようだった。そしていつしか、彼の視界は無数の足と小さなモヤのかかった車しか見えなくなっていた。

熱かったはずの地面は、母親の胎内にいるように心地よく、懐かしく、眠気を誘った。

「おやすみ」

少年が囁く。

カムヤは薄れていく意識の中、一言だけ消え入りそうな声で呟いた。

「エド・・・ゲイン」

「このカレーおいしい！」

僕は少し早い夕食に、カレーを作ってくれたケイコさんに向かって感嘆の声をあげた。彼女のカレーは、そのらのレストランよりもよっぽどいい味だった。何というか、口に含んだ時にくるピリツという辛さも去ることながら、その後で口の中全体に広がる、なんとも説明のしようのないこのまろやかさが、僕にとっては一番絶賛出来るポイントだった。

「美人の上に料理もうまいだなんて、神様はえこひいきだよなあ」

「黙って食べ！クソがきが！」

「！！！！げっ！！」

驚きで思わずむせる。怒鳴られたからではない。怒鳴ったのがケイコさんではなく、彼だったから驚いたのだ。

「チャ、チャールズ?!」

声を裏返しながら僕は目をむいた。まさか料理を作っていたのが彼だったとは、夢にも思わなかった。

「チャールズは料理が得意なんですよ」僕の向かいで同じものを食べている流がうつむきがちに言った。明らかに笑いを堪えているのが、小刻みに震えている肩で分かる。僕は口も半開きのままで、もう一度チャールズの方を向いた。そこには、エプロンをしっかりと付け、髪を頭の上に結っているチャールズが、銀の丸いおぼんを持ったままで立つ

ている。詐欺だ！と、叫びたいのを何とか堪えて、絞り出すように僕は言った。

「い、意外だな。料理が得意だなんて」

するとそれを聞いたチャールズが、頬から耳の先までみるみるうちに桜色に変えて、ついに吠えた。

「う、うるせえー！そんなもん関係ねえだろうが。お前は黙ってそれ食ってりゃいいんだよ！」

僕に投げ付けられたおぼんは、グワンツという音を立ててテーブルの上で踊り、部屋中には無駄吠えるチャールズの声と、僕の悲鳴、そしてその合間合間に流の上品な笑い声が響いていた。しかし、その時間も長くは続かなかつた。チャールズが僕につかみかかろうとするのと、それはほぼ同時のことだった。ドアに、何か大きなものが無造作にぶつかると、鈍い音を聞いて、僕は全員動きを止めた。そしてわずかな沈黙を置き、ドアがゆっくりと開きだすと、チャールズが腰に隠し持っていた銃を、さっそうとかまえて息を殺した。まさかエド・ゲインではという予感が脳裏をかすめ、緊張は燃えあがる炎のように僕の体を熱くした。そしてドアが開ききった時、思わず自分の目を疑った。何とドアを開いたのは、体中をどす黒い鮮血で染めたカムヤだったのだ。僕は、胸のあたりから込み上げてくるものを無理やり押し込んで、彼から目をそらした。床に転がっているカムヤの体は、もうわけが分からない程汚れていた。

「カムヤ」

流が呟く。

普段は冷静な彼でも、やはり血だらけの仲間を目前にするときくるものがあるのだろうか。

「おい、流ちよつとまて！」

カムヤに歩みよろうとする流の肩を、チャールズがむしり取るように引いた。

「あれを見る、何かおかしいぞ」

彼の指さす方を見ると、なるほど確かにそれは妙な光景だった。

どこが傷かもわからなくなっているカムヤは、何か棒のようなものを腹の上で握った形で、僕らの目の前に倒れていた。しかもその棒はライトになっているのだろうか、手の中で付いたり消えたりと、短いサイクルで点滅を繰り返している。

「何で、カムヤはライト持ってるんだろ」

僕が言つと、突然チャールズがハツと我に返つたような顔で叫んだ。

「違う！あれはライトなんかじゃない！」

「え？」

僕の肩がビクツとはねる。

「逃げる！爆発するぞ！」

驚いて振り向いた時には、既に彼の背中だけが見えていた。『爆発』そう聞いても、僕はチャールズの背中を追うことが出来ないでいた。何故なら、すぐそばで人が倒れていて、しかも彼らは僕らの仲間で、大怪我をしているのだ。見捨てて逃げるなんてこと、到底僕には出来ない

「忍！」

同じように逃げようとする流が、僕の肩をつかむ。

「早く来るんだ！」

この時僕は、初めて彼の必死に叫ぶ声を聞いたような気がする。

「離せよ！」

「駄目だ！来い！」

そして彼が、僕の体を窓のある方へ無理やり押しやったちようどその時、カムヤの体が激しく発光し、次の瞬間にはとんでもなく熱い爆風を生んでいた。

何が起きたのか分からない。というよりも、それを考える余裕なんてものは全くなかった。きつく瞼をとし、押しかかる炎の竜巻のされるがまま、僕の体は宙を舞った。そして多分、僕の体の中で始めに地面に触れたのは、左肩だったと思う。そこを激しく地面に擦り付けられるような、摩擦で焼ける痛みだった。例えるなら、机に擦り付けられる真新しい消しゴムの気分はこんなものではないだろうか。後はもう、どこがどこにどうぶつかつたかなんてどうでもよかつた。とにかく体中が燃えるように熱く、痛かつた。

「いつてえ」

僕がやつと、瞼をあけられたのは倉庫から何メートルも離れた所にある、大木に到達してからだだった。どうやらここにも体を打ち付けたらしく、背中が痛い。

まだ少しぼやけている視界を首から下に落とすと、服が細かく切り裂かれたように破れ、そこから火傷や切り傷が見え隠れしている。僕は右ひざを立て、左肩を右手で押さえると、後頭部を大木へコツンとあてた。この分だと、鎖骨あたりが折れているかもしれない。

「無事・・・だつたようですね」

すぐそばにある茂みから、流のかすれた声が聞こえてくると、僕は心から一息つけた。しかし、燃え盛る炎の灯りで見える彼の傷は、僕のそれとなんか比ではなかった。右手は完全に焼け爛れ、全身、まるで真紅の服で統一しているような姿だった。それを見た時、僕は目を覆いたくなるような吐き気と、同時にハッと思うことがあった。

「流、お前、まさか僕をかばって？」

彼はフツと笑った。

「私も、まだ甘かったということですかね」

「流」

急に目頭が熱くなつて、僕はうつむいた。けれど、僕の視界を歪ませるそれは、決して嬉しくてそうなったものではなかった。この涙は、一時の感情に流されて、結局足手まといになんかなくなった自分自身に対しての悔し涙だった。流は自己嫌悪の闇に落ちようとする僕へ、そつと手を伸ばし、伝い落ちようとする涙を拭ってくれた。目眩がしそうな程暖かく、まるで、その部分の傷だけが治っていくようだった。

「あなたがそんなことでどうするんですか？笑ってください」

「さあ、肩を貸しますから立ってください」

だが、そう言っただけが僕の手を握ろうとした時だった。

赤く染まっている彼の腹部がブツと血を噴いたかと思うと、今度は空中にドオンという地鳴りのような不快な音が響いて、僕は耳をふさいだ。

「……！」

そして目の前で彼の体はくの字に折れ、気がついた時には僕に覆いかぶさるようにして倒れ込んでいた。

「なが……れ？」

腕の中にある彼の顔を見ると、口からも相当量の血を吐き出しているのが分かる。息も荒く、いつ停まってもおかしくない様子だ。僕はゴクリと唾を飲み込んだ。

「おい、しっかりしろよ。どうしたんだよ」

体を軽く揺ると、とじかけた流の瞼が再び開き、僕を見あげた。本当にこれで何か見えているのかと不安になるくらい、彼の瞳は正気を失いかけている。

かなりまずい状況だ。

「忍、逃げて……ください」

消え入りそうな声言いながらも流は、僕の上に横たえていた体を何とか起こし、こっちに背を向ける形で立ちあ

がった。傷だらけの背中が、目を覆いたくなる程痛々しい。

「何言ってるんだよ。早く病院に行かなきゃ」

かぶりを振って、彼は言った。

「彼が行かせてはくれなさそうですよ」

「え？」

脳からの伝達を邪魔するような激痛に耐えながら、どうにか立ちあがり、流の横に立つと、僕の呼吸は息を吸い込んだところで止まった。僕の瞳に映る光景は、燃えているとか、火事だとか、それは随分と控えめな言い方だった。

少なくとも僕らの目の前に広がるそれは、まるでどこかの活火山の噴火を、ここで再現しているかのようだった。けれど、僕が息をするのも忘れてしまう程驚愕したのは、そんなことが理由ではなかった。どこが発火点かもわからない程吹き出す炎。そこに揺らめいて立つ、きゃしゃな人影を見たからだった。

「チャールズ？いや、違うー！」

人影はゆっくりと僕らの方へ近づいてくる。

「まさか・・・」

火の粉が、まるで孢子のように所かまわず飛び回り、辺りを明るくしてはまた闇を生む。速くなる鼓動とは裏腹に、僕の思考回路は嘘のように回転を止めた。一つの答えだけを目の前に表示したまま、他の可能性なんて考えられなくなっていた。この状況は、足し算や、かけ算のように答えの一つしかないものではなく、あらゆる可能性の転がる現実だというのに・・・何ということだ。こともあるように僕は、一つの答えに絶対的な確信を持っていた。しかも最悪な答えに。人影は既に、表情が分かる程僕らの近くに立っていた。高校生くらいであろうか。眉目秀丽とはよく言ったものだ、と思う。少年のその真っ白な肌と、長いまつげ、すっと通った鼻梁と濡れて光る唇はまるで虫の一匹も殺せないような無垢な美しさを、そのまま象徴しているかのようだ。ただどこいつは、

「エド・ゲイン」

そう、流の言つとおりだった。

僕らの目の前にいるこいつこそが、サイコパス、エド・ゲインであり、僕ら全員の宿敵なのだ。とはいっても、チャールズまでもいない今、二人だけの敵になってしまったが。

「カムヤに刺さっていたあのナイフ、リモコン式の爆弾ですな」

かすれ声で流が言った。

「そうだ」

まるで人形のように、表情を崩さずエド・ゲインがそれに答える。

それを見た瞬間、僕は首筋が凍る思いだった。無垢な少年だなんて笑わせる。顔の印象が持つ意味なんて、何も無いということが今ここではつきりと分かった。

「始めは・・・」

長いまつげを伏せて、まるで無表情に彼は言った。

「小学生だった。仲間だろ？お前らの。泣きわめいていたよ、手足をばたつかせてね。それを見ながら、体中にナイフを突き刺す快感っていったらなかったね。昔、あつたよな。黒髭ナントカ・・・そうそう、危機一髪だ。あれのおもちゃ、好きだったんだ。一番楽しかったのは外れの場所だった。首が飛ぶだろ？それを見てみると、心が騒ぎ出すんだ。けど、不思議なことにあの小学生はどこを刺しても、首が飛ばないんだ」

「なんて奴だ・・・」

沸いてくる怒りを押し止めながら、僕は呟いた。

「でも大丈夫。僕が、彼の首を切断してあげたから」

切れた。堪忍袋の緒が本当にあるのなら、切れるのは今しかないと思った。僕は拳を握り、踏み出した。が、遮断機がすぐに降りてきて僕は重い足を止めた。流の腕だ。

「どけよ」

彼を睨みつけながら、僕は言った。例え誰に止められようとも、この煮えたぎる怒りをエド・ゲインにぶつけるまでは気がすまなかった。

「逃げてください」

「何言ってるんだよ。エド・ゲインが目の前にいるんだぜ」彼の意外な一言に驚き、かぶりを振る。冗談じゃない。

ここまでできて逃げろだなんて、パチンコで7が三つそろっているのに無視して帰るようなものだ。しかし彼は断固として譲らないという表情だ。

「どけよ！こいつをぶつ飛ばしてやる！」

と僕が彼の腕を振り払って、強引に前へ出ようとした時だった。

左数十メートル先から、けたたましいエンジン音と共に、真っ赤な何かが炎の中からとび出して来るのが見えた。始めは燃えているのかと思ったが、違った。僕らから少し離れた所で、軽くスピッターをして止まったそれは、流の



愛車、ファイアット・バルケッタだった。

しかも運転席には、僕らより多少軽く怪我を負ったチャールズが座っている。

「無事だったんだ！」

チャールズはわずかに口元から笑みをこぼした。

「忍、さっさと乗れ！」

僕は頷いた。

「流、もしも逃げるって言うならお前が先だ。病院に行かないきゃ」

しかし、彼はそれさえ拒んだ。

「私の車は二人乗りですから。あなたが行ってください」

「何言っているんだよ、お前は怪我を……」

「忍」

僕の言葉を遮って、振り向いた彼の横顔は、ひどく悲しげだった。もしかするとそれは、揺れる炎の作り出した幻覚だったのかもしれない。けれど僕には、彼が泣いていると感じる程、悲しげに、優しげに、この瞳に映ったのだった。この表情に理由があるのなら、それは多分、聞き分けのないだっこのような僕だろう。僕は、きつく唇を噛んだ。ここから立ち去ることが今の僕に出来る全てだと、いやがおうにも理解させられた。

「何やつてるんだ。さっさと乗れ！」

しびれを切らしたチャールズがクラクションを鳴らす。

僕は彼を見ながら渋々頷いた。

「忍……」

思いを残したまま立ち去ろうとする背中から、不意に流の音が聞こえ、僕は足を止めた。

「あなたはサイコパスになりきれではありません。ちゃんとした、正常な人間です。もしも、私がエド・ゲインをここで倒せなかった時、絶対にサイコパスとして戦わないでください。あなたはサイコパスとしてはまだ発芽したばかりの小さな芽です。けれど、人間としては、どんな花よりも大きく強い……分かっていきますね？人として、戦ってください」

「……ああ」

彼の言葉に、振り返ることはしなかった。もし、もう一度振り返ったならば、一度と前へ進めなくなること僕は知っている。

「分かったよ」

助手席に乗ったか乗らないかで、チャールズはアクセル

を踏んでいた。流とエド・ゲインの姿は瞬く間に小さくなり、気がつくといつの間にか視界には誰もいなくなっていた。普段は口うるさいチャールズの言葉も、今はなかった。森を抜けると、赤々とした空は手の届かない所にあった。流と一緒に置いて来たのだ。

僕が喉咽のもつれるのを必死に堪えようとうつつむくと、痛み始めた背中に夜の闇が降ってきた。

部屋の明かりを消すと、月の出ている外の方が幾分明るい。僕は、包帯だらけの両足を抱いたままで、ベッドからぼんやりとその景色を眺めていた。街外れだからだろうか。気味が悪い程、静けさだけが辺りを漂っている。まるで、しん、という音まで聞こえてきそうだ。ふと、闇に慣れた目で部屋の中を見回す。前回ここへ来た時よりも本棚の上のぬいぐるみが増えていようような気がする。いや。大切そうに並べられた大小様々なそれは、確かに増えていた。一番大きくて、ど真ん中に座っているクマのぬいぐるみ。新入りはそのクマの腕の中に抱かれて、というよりは挟まれているようにしか見えないのだが、とにかくその中にいた。以前僕がゲームでとってやった青い鳥のぬいぐるみだ。

ここが鈴菜の部屋だということを知っているはずなのに、あらためてそう思うと、体温が何度か上昇したような気がした。彼女のアパートへ転がり込んだには理由があった。一つはそれがチャールズの提案であったこと。そしてもう一つは、僕ら二人の傷が思いの他ひどく、すぐに手当が必要だったこと。そのことを考えると、病院よりも近い場所といったら彼女のアパートくらいしか考えつかなかったのだ。彼女を巻き込みそうで恐かったが、今となっては後の祭りというやつだ。まあいい。あいつはこの僕が体を張って守ってやればいいのだ。『仲間の一人も救えなかった僕に果たして何が出来るのか?』という不安が、一瞬脳裏をよぎったが、それをうち消すように僕は呟いた。

「だからこそ、今度は守るんじゃないか」

初めから弱気になっていたら、それ以前に諦めてしまっていたら、出来ることも出来なくなってしまう。諦めなければ、可能性はあるのだ。そう思えば思う程、僕の中では巨大な勇気が生まれていた。余裕や保証なんてものはどこにもない。だからこそ出せるような、追い詰められた者の

みが発揮出来るという、そう、まるで火事場のくそ力にも似た、出し惜しみないありったけの勇気だった。裏を返せば、それはエド・ゲインと共に業火の中に残った流の死を前提とするものであったが、仕方ない。こうでも考えなければ、僕は永久にこの勇気を手に入れられなかっただろう。現実には想像よりもずっとシビア出来ている。

「もう・・・やるしかないんだ」

僕は忍び込む月明かりを崩したひざに寝かせながら、一人、ひそかな決意を拳に込めていた。

「ケイコさんはお砂糖、幾つですか？」

笑顔の鈴菜が、角砂糖の入った丸いビンを振りながら言った。

「ああ、私、砂糖入れないの」

「そうなんですか？」

少し残念そうに、それをあつた場所へ戻す。

「あ、それじゃあ・・・」

また何かを思いついて、鈴菜は手のひらをならした。けれどそれは、彼女が行動に移ろうとした所で止められた。

「落ち着いて」

という、ケイコさんのたしなめるような一言だった。

「あなたが動揺して落ち着けないのは分かるわ。でもここはあえて落ち着くふりをしていて」

彼女は付け足して言った。鈴菜が今までつけていた笑顔の仮面の下には、不安を絵に書いたような、今にも泣き出してしまいそうな顔が隠れていた。仮面を取り払った彼女は、結んだ唇を振るわせて、必死に何かを堪えている様子だった。

さつきまでのあのはしやぎようが、まるで嘘のように感じられ、それはかわらずともケイコさんが『ひよつとして鈴菜さんも二重人格のでは』と、錯覚してしまう程だった。

「さあ、とにかく座って。説明するわ」

ケイコさんは一度立ち上がり、鬱病患者みたいになっっている鈴菜の肩を優しく抱きながら、彼女を引かれた椅子の横まで連れて行った。鈴菜は力なくそこへ腰を下ろすと、何年も昔のことを思い出したようにふと、顔をあげた。

「ああコーヒーね。待ってて、私が持つてくるから」

そう言ってケイコさんが、コーヒーカップの置いてある

流し台へ向かうのと、鈴菜が震えた声で彼女を呼んだのは、ほぼ同時のことだった。背中からの声に、ケイコさんは立ち止まり、行き着いた流し台の縁に両腕を立てたまま黙した。

振り向きはしなかった。多分、鈴菜は泣いている。と分かっている上での、彼女なりの優しさだったのだろう。鼻をグスツとすすりあげ、涙の絡まったような声で鈴菜は言った。

「何で……どうして忍があんな大怪我しなきゃいけないんですか？あの綺麗な男の人と会ってから、忍変わっちゃって……。全然私と会ってくれないし、電話はよく来たけど、私が忍のアパートに電話するといつも留守だったし。そんな日が続いて、今度は、こんな……。血だらけになった。肩も骨折もしている、みたいだし……。一体彼の身の回りで、何が起きているんですか？あなたたちは一体何者なんですか？忍があんなっちゃったのは、あなたたちが関係しているんじゃないですか？」

力強く、責め立てるようなきびきびした口調だった。けれどそれが、胸の奥から沸いてくる涙を必死に堪えるためのものだということケイコさんが知っていた。鈴菜は語尾に近づくとつれて、細く、消え入りそうな声に変わっていった。

ケイコさんは長いため息をついた後で、「そうね」と静かに呟いた。

「でもね鈴菜さん、これだけは分かってあげて」

さっきの自分とためをはるくらい力の強い口調に、鈴菜は幾分驚いた様子で顔をあげた。

「彼が頑張っているのは……。多分、あなたのためよ」

まただ。僕は唇を噛み締めた。いつの間に瞼をとじたのだろうという疑問を、ヘンリーという名の矢が追い抜き、僕に、突き刺さるような刺激を与えた。僕は低く呻き声をあげた。刺激のせいじゃない。またか、というものでこれで何度目かになる悪夢へのうんざりした気持ちと、再び幕をあげた殺人劇への恐怖だった。

『恐怖』

言葉にすればたいしたことのないそれは、実は人間一人を壊すのに十分な効力を持っている。僕自身、それを経験

しているのだから間違いない。けれどその恐怖は、あの頃の・・・そう遠くはないあの頃のそれとは全く違っていた。

以前とは比べものにならないくらい程凶暴に、鋭利に、それでいて驚く程したたかに僕の内面を傷つけていく。

草原はいつもと変わらない風に撫でられていた。ただ一つ風景の中で変わったと言えば、すぐ近くに年期の入った大きな風車が二つ並んでいるということ。その下には見たこともない色とりどりの小さな花々が植えられているというのだ。

「綺麗だあ！」

大きく口を開け、さっそくベッキーが感嘆の声をあげる。「ベッキー、俺たちは先を急ぐんだ。こんな所で立ち止まっているな」

止めたところで、言うことを聞く子だとははなから思っちやいない。ただ言ってみただけだ。案の定彼女は、僕の声など風にも聞こえないかのように、喜々として花壇へ飛び込み、土と草花にまみれだした。

「まったく」

ため息をつき草の上は腰を下ろす。昨夜雨が降ったからだろうか、触れた所から、じわりと冷たさを感じる。

「しかたのない子だ」

再び僕はため息をついた。僕がこの夢での、自分が置かれている立場のようなものについて気がついたのはつい最近のことだ。今まで夢だと思っていたこの世界を、流やケイコさんは、それは夢ではなく、僕の前世、つまりヘンリーの記憶だと教えてくれた。それならここは、客観的に判断すると『僕の世界』ではないということになる。つまりここでの僕は、存在も許されない者。言い方を変えれば招かざる客なのだ。それなのに僕は、この世界に確かに存在している。ヘンリーの記憶という世界の中で、ものを見て、何かを考えて・・・。そう思った時、ふと頭に浮かんだのだ。

『僕は一体何の役でこの世界に生きているのだろう』

それが、僕の置かれている立場を考え始めたきっかけだった。第一に、夢を見る度に景色が少しずつ違っていることから、草花や建物などの静止物ではなさそうだし、ましてベッキーであるはずもない。一瞬ヘンリー自身ではとも思ったが、僕が彼だったら人殺しなんてするはずがないという考えが瞬く間にそれを遮った。しかし真実はそうやって自問自答を繰り返すうちに、徐々にその姿をあらわ

にし、何度目かには、光明の下にあった。そう、僕は一つの個々たる生命体ではなく、寄生虫のように他の『何か』と共存する者だったのだ。そしてその『何か』というのは言つまでもなく、僕の前世、ヘンリーというわけだ。もつと詳しく説明すると、僕という存在は彼の両目と、脳、そしてわずかな意識だけで、けれどそれだつて全てを征服しているのではなく、ほんの表面上。彼の見ているものが僕にも見え、彼の感覚や考えが僕に伝達するにすぎなかったのだ。

「ねえ、ヘンリー」

泥だらけになりながら、ベッキーは言った。

「何だ」

「おいでよ。お花、いい匂いだよ」

彼女ははにかむように笑つた。この娘だつて、周りにまともな大人がいれば、純粹な、本当に芯からかわいらしい少女になつていたことだろう。幼い彼女に責任はない。悪いのは、人殺しが当たり前の行為だと錯覚させたヘンリーの方だ。

「はやくはーやーくう」

柔らかい地面にうつ伏せになりながら足をばたつかせる彼女を見ても、

「そんなことはどうでもいい。遊びに飽きたのならさつさと立て。日が暮れるぞ」

にべもなく言つて、僕は立ちあがつた。

「そら、早く来い」

ベッキーがふくれる。

「けちい。少しくらい遊ぼうよ」

やれやれというふうには僕がかぶりを振つた。

「駄目だ。早く来い」

彼女は口を尖らせ、渋々と立ちあがつた。

パンパンと音を立てて、体中についた土をはらう。

「ヘンリーの、けちい」

空を燃やし大地に幾つもの長い影を刻みながら、巨大な太陽は地平線の果てへと埋もれていく。綺麗だとか、美しいなどという形容詞ではとても表現しきれない程、その情景は芸術的かつ神秘的だ。僕の隣ではベッキーが小さな両腕を振りかざし、口を大きく開けては飛び回っている。ま

だ幼い彼女にとっては、見るもの、聞くもの、全てが新鮮に感じられるのだろう。ヘンリーがベッキーを愛したのも、彼女の、そんな風な何にでも素直に感動出来る純粹さにひかれたからであった。それは、彼の中で生きている僕だからこそ分かることだった。けれど僕は、この愛が決して成就しないことを知っている。いや、一度は結婚という形で果たされるだろう。しかし彼らの夢物語はそこで幕が閉じられることになる。エド・ゲイン。彼の手によって。だから今こうして、愛しき者の敵をとるために、ヘンリーは僕の中で甦ろうとしているのだ。彼の気持ちは、本当は痛い程分かっていた。出来ることならそれをかなえてやりたいとも思った。僕が彼の立場でも、やっ

ぱり同じことを望むだろう。だけど、僕はヘンリーではなく西那忍であり、恋人はベッキーではなく雨宇詩鈴菜なのだ。例え僕の前世が誰であつたとしても、僕の人格は僕だけのものではないのだ。ヘンリーとベッキーのことは心から同情するが、それでも彼にこの体をわたす気なんて毛頭なかった。いつの間にか、僕らの周りには完全な夜が訪れていた。明るいうちは清々しく心洗われるような、気味悪さを演出している。

「ヘンリー、火が少し弱いから小枝たしていい？」

揺らめく炎をうっとり眺めながら、ベッキーは言った。僕は無言でそれに答えた。

焚き火は僕が作ったものだった。草地を一度掘り、そこに小さな石を敷き詰め、ベッキーの拾い集めてきた小枝や枯れ葉をかぶせ、火をつけたのだ。

ベッキーはこの焚き火が大好きだった。彼女の目の前で踊っているようにも見えるそれは、まるで自分を灼熱の中へと誘っているような、魅力的な動きをするのだ。それを目前にする度にベッキーは、全ての者に愛されているという自惚れにも近い、奇妙な錯覚に陥るのだった。

「ベッキー、炎に手をつまむのはかまわないが、中は熱いぞ」

「・・・分かつてるよ」 渋々伸ばしかけた手を引き戻しながら、彼女はふくれた。

それを見た時だった。不意に、妙な懐かしさが矢のように僕のどこかを射抜いていた。何だ、と呟いてみたところで答えはなかった。そればかりか、たつた今感じた懐かしささえも忽然とその姿を消してしまっていた。

今のは一体何だったのだろう。

「ねえヘンリー」

肩にかかっている毛布をかけ直しながら、ベッキーが言った。

「もう眠ってもいい？」

「眠いのか」

「うん」

「そうか。じゃあ眠るといい」

「うん」

コクリと頷くと彼女は立ちあがり、恥ずかしそうに、ゆっくりと僕の膝の中へ割るように入ってきた。一人で眠ると恐い夢を見るので、いつも彼女はこうして僕の中で眠るのだ。眠っている時のベッキーは、まるで天使のうたた寝を思わせるような、清らかなものだった。僕、西那忍は彼女の寝顔が好きだった。そして多分、ヘンリーも彼女のそれが一番好きなのだと思う。

ベッキーが寝息を立て始めたのは、それからすぐのことだった。僕の右腕に小さな頭を横たえ、紅葉のような手で、僕の手をしっかりと握っている。

小さくなつた炎の中に薪を何本か放った。メキメキという音の後に、パチパチという音がついてきて、炎は再び明るさを増やした。この辺りのは野獣なんてものは一匹もないので、そういう点では別に炎を継続する必要はなかったのだが、夜の異常な冷え込みのせいで簡単に消すわけにもいかない。だから僕の眠りはいつも断続的で、落ち着いたものではなかった。勿論、今夜だってそうだ。新しい薪をたし、疲れた臉をとじる。けれどそれだって完全に眠るわけではなく、眠りの国へ落ちるぎりぎりの所で、かろうじて意識を保っているのだ。そうしなければ、次に薪をたすことが出来なくなってしまう。まさに睡魔との戦いだつた。

ベッキーが僕の中で眠りについてから、僕は何度も目を覚まし、その度に薪を炎へと放った。そして、手元にある最後の薪を灼熱の中へ放った時、突如としてそれは起こつた。

一瞬を境にして、僕の内蔵全てが抜け落ちるような、かつて感じたことのない不思議な感覚だった。何かで後頭部を殴られたような痛みと、世界がひん曲がるようなグラリとした目眩を感じ、片手で眉間を押さえる。そして何度かそこを強く揉んだ後で重たくなつた臉をゆっくりとひらき・・・両方の瞳に映つた光景に、絶句した。何と、闇を



揺らす炎を境にした所に彼らがいたのだ。小汚い感じの金髪の男は太い腕の中で少女を抱き、その娘はまるで天使のような愛らしさを持っている。まさしくそれは……

「ヘンリー、ベッキー」

口に出してから、しまった!と思った。何故、どういう理由でこんなことになってしまったかは分からないが、とにかく彼らに僕の存在を気づかれるわけにはいかない。僕は息を飲んだ。今ヘンリーは下を向いて、ベッキーの寝顔に見入っている。だから僕がここにいることに気づいてはいない。いや、ひよっとすると僕のさっきの声にも気がつかなかったということ、僕の姿も声も姿もこの世界には存在していないのかもしれない。僕は破裂しそうな左胸を押さえた。とにかくここは逃げるんだ。このままここには危険だ、と自分の背中を押した。けれどどういうわけか、僕の両足は一步としてその場を離れることは出来なかった。凶悪殺人犯を目前にして、恐怖と緊張で、首から下が鉛のようになってしまっていたのだ。と、その時、彼が顔をあげた。僕はきつく瞼をこじ、闇の中へ身を投じた。

「座ったらどうだ」

聞き慣れた声に、痙攣という形で体中が反応した。彼だった。恐る恐る瞼を持ちあげると、彼の鋭い眼光が僕を見つめている。僕は固唾を呑んだ。彼には僕が見えているのだ。

「座れよ」

彼はもう一度、しかしさっきよりも低めの声で言った。

僕は無言で頷き、力なく腰を落とした。

「そう怖がるな。お前を狩っても意味はない。そうだろ」

彼は皮肉った笑いを見せ、

「お前、今まで俺の中にいた奴だな」

と続けた。

「知っていたのか」

「当然だ。ここは俺の世界だけ。まあしかし、お前という人間がいたから作り出せたものだけだな……お前、俺の来世だろ」

その一言で、体が一回り縮んだような気がした。僕はそれに答えなかった。

「名前は？」

「西那……忍」

「シノブ？シノブか……いい名だ」

ヘンリーは眠っているベッキーの頬を優しく撫で、口元

にほんの少し笑みをこぼして言った。

「なあシノブ。お前は一つだけ誤解していることがあるぞ」

「何？」

「お前、この世界を俺の生前の記憶だと思っているようだ  
が、それは違う」

「記憶じゃない？何言ってるんだよ。これはお前の記憶で、  
お前が僕の中で覚醒しようとする時の前兆なんだろ」

驚きを隠せず、無意識のうちに早口になる僕を見ながら、  
彼は苦笑した。

「確かにこの世界は俺の記憶から出来たものだ。しかしそ  
んなのはほんの一部でしかない。シノブ、この世界はな、  
俺がお前の中で覚醒するための経路なんだよ」

「？」

わけが分からず、眉間にしわをよせる。

「つまりだ、この旅を一本のロープに例えるとする」

ヘンリーは目に見えないメートル程のロープをはり、  
僕はただそれに頷いた。

「向かって右手の方が、お目の夢に俺が姿を現し始めた時  
だとする」

この時初めて、彼が僕の中で覚醒の芽を出したわけだ。

「それじゃあこの左手は何だと思っ？」

「右は始まり・・・そう来ると左は？」

彼の言葉をはっきりと理解するのにおよそ数秒かかった  
そして答えが見えた時、僕の中の時間は凍りついたように  
その動きを止めた。

「まさか・・・」

僕は迫る絶望に目にむいた。そう、始まりの反対は終わ  
りであり、彼の左手はまさにそれを意味していた。終わ  
り・・・それはつまり・・・旅の終わり。

「覚醒」

思った言葉が口をついて出る。

それを聞いたヘンリーはいやらしい笑みを浮かべ、こう  
言った。

「だから俺はこの世界で先へ先へと急いでいただろう。な  
るべく早く覚醒したかったんだ」

何て事だ、とうつぶさかけた時、ふと、待てよ、と思っ  
た。エド・ゲインを倒すために業火の中に残った、流のこ  
とだった。彼はどうしたのだろう。エド・ゲインさえ倒せ  
ば、この呪縛は消えるのではなかっただろうか。あの少年  
さえ死ねば、全ては終わるのではなかっただろうか。僕は

再び顔をあげた。

「ヘンリー」

「何だ」

「お前が覚醒しかけているということは、エド・ゲインは死んじやいないんだな」

「ああ」

それは流の死を確信する瞬間だった。僕は絶望と悲しみの追い打ちに、うなだれた。彼の死は覚悟していたはずだった。けれど、やはりどこかで彼の無事を期待していたのだ。明日にでも、ひょっこりと顔を見せに来てくれるのではないかとという根拠のない予感に賭けていたのだ。けれどそれは、ヘンリーの一言によって見事に打ち砕かれた。やはり、流はエド・ゲインによって殺されたのだ。膝の上では二つの拳が震えていた。その理由がなんなのかははっきりしなかったが、その中に、胸を引き裂かれそうな悲しみがあつたのは確かだった。

「シノブ」

ヘンリーの呼びかけに答えることはなかった。もしここで声を出したなら、情けない泣き声しか出て来なかったはずだ。僕は必死に嗚咽を堪えながら、かみ合わない歯を力チ力チと鳴らした。

「泣くな……。シノブ」

僕は、無言で頷いた。

気がつくと、僕は再び、現実の世界へと舞い戻ってきていた。白いレースからこぼれる白い光は朝のやわらかなものではなく、どちらかというところ、体を射すようなきついものだった。少しの間、ぼんやりと天井を眺め、さつきまで見ていた夢のことを思った。僕が悪夢と呼んでいたそれは、僕の傷をほんの少しだが癒してくれた。確かにヘンリーは凶悪殺人犯だ。その考えは今でもかわらない。けれど、言いようによっては、彼は、純粹でもあった。ベッキーに対する愛情にしても、憎むべき敵エド・ゲインに対する復讐心にしても、そして自分の欲望にも。

ヘンリーは、まるで不純物の一切含んでいないダイヤモンドのように、純粹だった。

「あれが、本来人間のあるべき姿なのかもしれないな」

僕の呟きは涙声だった。あの世界から唯一、涙だけは持ってきてしまったらしい。僕は苦笑した。

「まさか、サイコパスに慰められるとはな」

別におかしいことなんて何一つないはずなのに、僕はベッドの上で腹を押さえて、少しおおげさに笑った。腹の奥から絞り出した笑い声が、つながった放物線のような波を作る。そして、他人のものみたいな笑い声を聞く度に、耳元ではヘンリーの言葉が一句一句こだまするのだった。僕が夢から覚めようとした時、別れ際、確かに彼はこう言った。

『俺は今度こそ、ベッキーを守る』

その時の僕はまだ、彼の言葉が何を意味しているのか、考えようとしなかった。今はただ、ベッドの上で響く笑い声が、しだいに泣き声にかわっていくのを聞いているしかなかった。

僕らが鈴菜のアパートへ転がり込んで、ちょうど一週間が経った。あれ程ひどかった火傷もだいぶ癒え、いつでもここを出て行くだけの準備が出来た。けれどケイコさんは「そんなこと出来るわけじゃないじゃない！」と、断固として首を振るばかりだった。エド・ゲインが生きていると分かった以上、僕らと関係を持ってしまった鈴菜を、たった一人ここへ残して出ていくのはあまりにも危険というのが理由だった。ここへ残ること事態危険なのではと思ったが、  
「それこそカムヤのようになりかねないわよ」

の一言が僕をここへ留まらせる杭になったのは確かだ。

また、ヘンリーたちの旅も幾つかアクシデントはあったものの、幸か不幸か、そろそろその幕を下ろそうとしていた。ついに、街の光が見える所まで到達したのだ。それを目にした時、僕はかつてない程の虚脱感に蝕まれた。自分の体があったのなら、きつとその場に崩れ落ちるに違いないかった。あと何キロくらいあるのだろう。今、峠の上からそれを見下ろしているから、それでも到着まで二、三日というところだろうか。いや、覚醒が目前なのだ、彼らは寝る間も惜しんで、もっと早く到着するかもしれない。そうなったら、今度は現実世界での恐怖の幕開けだ。僕はうなだれた。万全は態勢でエド・ゲインとの戦いに望みたかったが、ヘンリーに覚醒されては元も子もない。そのことを考えると僕は、時間の理不尽さに、何とも腹が立つばかりだった。とにかく、様々な意味で残り時間は限られている。

「おはよう忍。もうお昼だよ。いつまで寝てるの？」

テーブルを拭いている手を止めて、鈴菜が言った。すぐそばのソファではタンクトップいっちょのケイコさんが、モデル顔負けの細い脚を組みながら新聞に目を落としている。

「朝食は？」

僕は頭を掻きながら、何ものっていないテーブルの上を見た。

「朝食も終わりましたよーだ！」

「朝はキャロットケーキ、昼はピザ、どちらもとてもおいしかったわ」

こいつら、朝から何てものを食ってるんだ。僕は歪んだ口元を右手で押さえながら、ソファへ腰を下ろした。すると入れ替わりでケイコさんが腰をあげ、はからづも、僕の視線は、彼女の腰から下を追った。

「どこ見てるのよ！」

不意に鈴菜から怒りの声を投げ付けられ、慌てて目を伏せる。

「もう、エッチなんだから！」

彼女は頬をふくらまして言った。

「べ、別にそんなつもりで見たわけじゃないよ」

「じゃあどういってもりで見たの！」

すでに弁解の余地なんてものはどこにもないようだ。僕は押し黙ったまま、引きつり笑いを見せた。と、その時。背後から「フツツ」という微かな笑い声が聞こえ、僕らは同時にその方へ目を向けた。声の主は当然ケイコさんである。

「な、何ですか？」

「だって、おかしくて」

口元を上品に隠している彼女の表情は、しかしいつものそれとは一変していた。何というか、今まで見せた彼女の表情は、どこか無理に作っているような違和感があった。

けれどこれは違う。この、少女のようなあどけない笑顔はものすごく自然で、暖かく感じられた。多分これが、本来のケイコさんのだろう。

「二人とも・・・」

ようやく笑いを押さえた彼女は、息を整えて言った。

「とても仲がいいから。見ているこっちが恥ずかしくなってくるわ」

「な！」

僕の顔が、耳の先まで一気に熱くなるのを感じた。

「と、突然何を言い出すんですか？さっきのは、僕が鈴菜にいじめられていただけですよ！」

気をとり直して言っていると、何やらゴモゴモと鈴菜があいづちをうっているのが分かる。どうやら彼女も僕と同じ状態らしい。

「あら。仲がいいじゃない。こういうのを、いちゃついてるっていうのね」

毛穴全部から火を噴くような感じだった。僕らだってそこから辺にいる恋人と何等変わりないのだから、仲がいいのは当たり前の話なのだ。けれどそれを面と向かって言われるのが、これ程までに恥ずかしいものだったとは思ってみなかった。僕は出来る限りの平静を装いながら、無言で玄関まで行き、そそくさと靴を履いた。

「どこ行くのよ」

早口で鈴菜が言った。

ドアのノブを回すなり、

「コンビニ。食べ物を買ってくる」

「ピザ、まだるよ」

「いらぬ。買ってくる」

外へ出てドアを閉める。長いため息をついて、苦笑した。

「まったく。あの空気には耐えられないな」

アパートから出ると、溶ける程の日光が僕の背中を射してきた。僕は手のひらで顔をあおぎながら、陽炎の揺らめく道を進んで行った。簡単にコンビニと言ってしまったが、そこまで行くには結構な距離があるのだ。

気がつくとも空はあかね色に染まっていた。アイスクリームにサンドイッチ、あとはウーロン茶のボトルを二本の入った買い物袋を両手にぶらさげながら、僕はアパートの階段を二段とばしでかけあがった。コンビニに行く前に、途中にある本屋で立ち読みしてしまったのがいけなかった。ほんの少しのつもりが、つい夕方になるまで読み耽ってしまったのだ。

鈴菜の部屋を通り過ぎ、数歩引き返す。

「ただいま」

ドアを開けると、中は静まり返っていた。下を見ると靴はあるので、出かけてはいないらしい。そもそも鍵が開いているのだからそんなはずはないのだが、それにしてもこの静寂は不気味だ。二人そろって寝ているのだろうか。

そつと靴を脱ぎ、しのび足で短い廊下を歩き、半開きのドアの前に立つ。深呼吸をする。きつと二人はあのソファの上で仲良く昼寝しているに違いない。何をそんなに緊張する必要があるんだ。そうさ、きつと二人は・・・と、ドアの隙間から顔をのぞかせる。息が止まった。馬鹿な！と、ドアを突きとばし部屋の中へ飛び込み、辺りを見回す。差し込む夕日が照らし出したのは、死んだようになつた、無人の部屋だつた。ソファは破れ、埃が漂い、反射して光っている。椅子は倒れ、足元には色々なものが落ちていた。僕はふらふらと後ずさり、背中に壁があたりと、その場へ座り込んだ。突然の出来事に、動悸がまだ治まるうとしない。

ふと手元にある電話を見ると、留守電が入っているのが分かつた。もつろつとした意識の中で再生を押すと、「イツケンデス」という機会の声の流れ、その後テープが続いた。

「やあ、忍君、帰ったかい」

全身の毛が、一気に逆立つた。彼だ。この声の主はまさしく彼のものだ。

「どう？傷の具合は、だいぶよくなつた？この数日間、僕はわざと君らをほおって置いたんだ。ここにすることは知っていたよ。あの流とかいう奴の車に発信機をつけておいたんでね」

「何？」

「とにかく、決着をつけようかと思う。君らは僕にとって邪魔な存在なんでね。特に完全に覚醒されると、こっちの命も危うい。美人二人は預かつた、心配いらない、殺しはしないよ。まだね。君を殺した後だ」

スピーカーからは、いやらしい笑い声が聞こえていた。やつと正気を取り戻した僕は、壁を力いっぱい殴りつけ、歯をきつく食いしばつた。

エド・ゲイン、お前はどこまで汚い奴なんだ！

「・・・そこでだ、僕らのいる場所を教えてあげよう。君が僕に殺されにくるようにな」

僕の眉毛がピンツと上がる。

「時間は二十二時、場所はここからそう遠くはない、七丁目にある高橋という豪邸だ。そこら辺まで来ればすぐに分かるよ」

漆黒の闇が落ち、夜がやってきた。僕はまだ、主人をなくした部屋の中で一人たたずんでいた。外は月が出ているのだろう。うつすらとした金色の光が、開いている窓からそっと忍び込み、壁にかけられた時計を照らしている。もう少しで十時だ。僕はうつむきがちになって、まつ毛を伏せ、鈴菜のことを思った。何の関係もない鈴菜まで巻き込んでしまうなんて、自分のふがいなさにつくづく腹が立つ。

「鈴菜、ケイコさん、必ず助けてやるからな」

壁づたいに立ちあがり、歯を食いしばる。

「待っている。エド・ゲイン！」

七丁目の高橋家。なるほど、確かにそこは見てすぐに分かる程の大豪邸だった。入り口の両端には大きな門があり、それをつなげるように柵がついている。正面には芝生を敷き詰めた庭と、その真ん中には大きな池・・・中には鯉が何かいるのだろうか？そして玄関は左手にあった。扉の中央にはとっ手をくわえたライオンの顔がある。どう考えても、ホラー映画で出てくるような洋館にしか見えない。

僕は大きく息を吸い、吐くと同時にノブを回した。家の中には静まり返っていた。明かりも一つもついてはいない。ただ窓の数が異常に多いため、差し込む月明がおぼろげに辺りを照らしてくれている。慎重に辺りを見回す。すぐ近くの壁に何か書かれているのが見える。目をこらすと、そこにはこう書かれていた。

『上へ』

「上？二階か」

土足で家へあがり、階段のですりへ手を伸ばす。

呼吸さえためらいながら、ゆっくりと一歩進む。ミシリときしむ音が、僕の寿命を一年くらい縮めるような気がした。階段は折り返しになっていた。一段一段、まるで爆発物を取り扱うような心境だった。やつのこのことのぼり詰めると、左手にドアがあった。耳をすますと、中から何か物音が聞こえてくる。この家に入って初めて、人の気配を感じた。多分、いや確実に彼はここにいる。そしてあの二人も。恐る恐る部屋の中へ入ると、すぐに彼らがどこにいるかが分かった。部屋の中には家具らしき物は何もなく、ただっ広い空間だけが存在していた。そして奇妙なことに、



開いたドアからはじまでは、一列に並んだ畳のように白い  
タイルで敷き詰められ、その他は全て、白と黒のタイルが  
交互になっっていた。まるでチェスの盤のようだ。三人はそ  
の盤の先に座っていた。ただし、エド・ゲインは優雅なウ  
インザースタイルの椅子に、残りの二人は両手両足を縛ら  
れ、タイルの上へじかにであるが。

「ようこそ。僕の城へ」

彼は月明かりを背に、不敵な笑みを浮かべながら言った。  
気のせいだろうか、あの燃え盛る炎の中で見た時よりも、  
その表情はやや豊かに感じられる。

「二人を返してもらおうぞ！エド・ゲイン」

「ええどうぞ。ただしそれは僕に勝てたらですよ」

「勝つさ」

僕が一步踏み出したところで、彼の手があがった。

「それ以上進まないでください。死にたいんですか？」

「この床、妙だと思いませんか？白と黒のタイルなんて  
ねえ、そうでしょう」

「？」

エド・ゲインはあごをしゃくりながら言った。

「ゲームをしようかと思いましたが。実はあなたたちをか  
まわなかったのは、これを作っていたからなんですよ。さ  
すがに疲れましたよ、たった一人でこれをやったのですか  
らね。さてと、ゲームの内容なんですが、いたって簡単で  
す。このタイルの内、幾つかには爆弾が仕掛けてあるん  
ですよ。地雷というやつですか。しかし結構強力でね、この  
部屋を全て吹き飛ばすだけの威力がある」

僕は目をむいた。爆弾だって？こいつ一体何を考えてい  
るんだ。

「勿論仕掛けていない場所もあります。これでもう分かっ  
たでしょう、このゲームはあなたの勘を試すゲームです。  
僕を倒し、この二人を助けたければ、見事埋め込まれたト  
ランプを抜けてくるしかありません」

「何て奴だ」

僕は歯を食いしばり、彼に精一杯の睨みをきかせた。だ  
けどどうする？どうやってこの場をきり抜けたらいい？彼  
の言っていることは本当だろう。だから困るのだ。これが  
嘘だったなら、どれだけいいか。

「どうしました？来ないんですか？」

僕は鈴菜とケイコさんへ目をやった。二人ともガムテー  
プで口をふさがれているため、言葉は発せられない。今の

僕に頼れるものは何も無いのだ。

もう一度足元を見る。

「だれだ、どれが爆弾の埋まっていないタイルだ」

緊張と焦りで額にジツトリと汗が滲むのが分かった。鼓動は早くなり、息も切れ切りに繰り返される。気を抜くとそのまま倒れてしまいそうだ。

「悩むでしょう」

エド・ゲインは楽しげに言った。

「そんな恨めしそうな目で見ないでくださいよ。これが僕の狙いだったんですから。この二人がいなければ、あなたはおそらく、さほど迷わずに重要な一步を踏み出していたでしょう。そうすれば最悪の場合でも僕も道連れだ。けれどこの状況は、あなたにとっては最悪のものだ。何せ大切な仲間、恋人がいるんですからね」

そう言うのと彼は、甲高い声で笑い、僕を見下した。

「半端に人間に近いのが仇となったようですね。あなたが完全に覚醒していれば、仲間意識なんてものはほとんどない」

「仲間意識が強いのは僕だけじゃない。流だって、そこにいるケイコさんやチャールズだって自分以外の者のために体を張っているんだ」

「あなたたち全員が半端者なんですよ。結局ね」

「何だと！」

「さあ半端者の忍君、僕に君の意地を見せてくださいよ」

悪魔の微笑に、僕は全てを飲み込んだ。それこそ唾も、息も、言葉も、何もかも全てだ。確かに彼の言うとおり、今の僕はすっかり畏にはまってしまっていた。悔しいが、このゲームを攻略しない限り、その先はいつまで経っても生まれないのである。しかし、これが完全と不完全の違いかと諦めかけた時、僕の頭の中で、ある言葉が浮かんだ。

『あなたはサイコパスとしてはまだ発芽したばかりの小さな芽です。けれど、人間としては、どんな花よりも大きく強い。分かっていますね？人間として、戦ってください』

あの日、別れ際に流が言った言葉だ。

それは漠然と目覚めるような、奇妙な感覚だった。今までの迷いが、流の言葉を思い出したとたん、嘘のように拭われ、入れかわりにとめない勇気が沸いてくる。僕は唇を結び、未だ余裕を見せているエド・ゲインを睨めつけた。

「どうしました？」

と彼は言った。

「このゲーム僕はおりる」  
「？」

鈴菜の表情が、不安で歪む。

エド・ゲインは何度かあごをしゃくると、組んでいた足をゆっくりと崩し、立ちあがった。

「それでは、この二人は助けられませんよ」  
僕は苦笑した。

「お前は僕が悩み苦しみ、そして死んで行くのが見たかったんだろ？以前、流から聞いたことがあったよ。サイコパスは、自分の命すら目的遂行の道具にするよね」

「・・・だから？」

淡々とした口調は、彼の余裕の様を作り出していた。が、僕は確かに見た。彼の表情に、一瞬だが狼狽の色が走るのを。僕は口の両端をわずかにつりあげた。

「この白と黒のパネル、全てに爆弾が埋め込まれているな」  
「！」

暴かれた真実に、彼は目をむいた。信じられない！その表情はまさしく、その一言を象徴しているかのようだ。僕は鼻を鳴らし、腕を組んだ。

「サイコパスの考えそんなことだ。どうせ、僕を悩むだけ悩ませて爆死させるつもりだったんだろ？人質もろともな」

「・・・」

「だが、お前の最終敵な目的はあくまでも殺戮。この部屋が爆発したと同時に逃げ出す方法もあるはずだ」

「そこまで見抜くとは、たいした人です」

そう言った彼の顔からは、既に余裕の仮面ははがれ落ち、かわりに、怒りに満ちた素顔がにじみ出していた。

「ポーカーフェイスもそこまでだな。エド・ゲイン！」

しかし僕が、そう言って組んでいた両腕を崩しかけた時、悲劇は起こった。突然、右の太ももが吹っ飛ばされるような激痛を感じて、僕はその場に転げた。まるで赤く焼けた鉄パイプを射されたような痛みだった。低く呻き声をあげると、それを打ち消すように、部屋の中に聞き覚えのある大きな音が反響する。もつなになんだか分からなかった。とにかく今は意識を保つことで必死だった。

「何・・・だっただ」

はいつくばりながら、太ももを見ると、どす黒い鮮血が溢れ出ている。片方の手で押さえても、それは指と指の間からしたたかにこぼれていく。

「くつそ・・・」

一体何だというんだ。僕の体はどうしてしまったっていうんだ。息も切れ切れに、どうにか立ちあがるかと全身に力を入れる。同時に右足が痛みに襲われ、僕は口元を歪ませた。

「情けない姿だ」

飛び込んで来たその声に、僕は息を飲んだ。今は・・・今のは、エド・ゲインの声じゃない。確かに聞き覚えのある声ではあったが、彼のものではなかった。僕はゆっくりと顔をあげ、驚愕した。

「何故、お前が」

無意識にこぼれた一言だった。僕の瞳に映った彼は、最初にエド・ゲインの餌食になったとばかり思われていた少年、高橋隆の姿だった。しかし、僕の知っている彼は、いつももろろつとして、流やケイコさんのような自己をまるで持っていないかのようにだった。それがどうだろう。ここにいる隆の表情は、自信に満ち溢れ、そして何かを追い求めるような、強い信念みたいなものを瞳の奥に秘めている。僕は舌を打った。彼が僕を打ったのだと、拳銃をみて初めて気づいたのだ。

「まさか・・・お前が、エド・ゲインの仲間だったとはな」  
それを聞いた隆は、銃口を僕に向けたまま、まだ大人になりきっていたに声で甲高く笑い声をあげた。

「お前、ククツ、まだ分かっていないようだな」

「何だと？」

「この状況を考えてみるよ」

「？」

「お前、さっき言っていたじゃないか。この部屋から逃げ出す方法があるはずだってな。そのとおりだぜ。お前の言うとおり、この部屋からはエド・ゲインだけが脱出することが出来るんだ」

ハツとして、椅子の前に立つ彼へ視線を移す。

「まさか」

「そつさ」

隆は愉悦の表情で、身動きの取れない僕の額へ冷たい銃口を重ねた。

「お前が、エド・ゲイン？」

「しまった」とか「ちくしょう」とか、悔しがる言葉さえ浮かんではこなかった。ただ一言「僕らの負けだ」という文字が無造作に足元に転がっていた。結局、勝負は始めからつ

いていたというわけだ。

「流が死んだのは俺にとって好都合だった」

彼は笑いをかみ殺しながら言った。

「あいつに生きていられると、いつかはばれていたらどうからな。生き残ったのがお前でよかったよ、あいつ、どういふつもりでお前を助けたのかは分からなかったが。最後の機会だ。ここで種明かしもしておこうか？」

よほど勝負を確信したことを、もとい、完璧に僕らをはめられたのが嬉しいのだろう。

「あそこに立っている奴は、俺がさらってきたんだ。街でな。奴の本当の名は、斎藤直也といって、たたのボンクラ予備校生だ。毎日疲れた目をしてたから、ほんの少し刺激を与えてやった」

「何を、したんだ」

「催眠術さ」

「え？」

「ああいう単純な人間ほどかかりやすいものだ。俺の完全な人形になるまで、何度も繰り返しかけてやったのよ」

離れていた彼視線が再び僕に戻った。全てを話終えたのだろう。僕は静かにまつ毛を伏せた。ついに僕は死ぬのだ、という諦めの念が、不思議な程流暢に頭の中で響いている。暗闇の中で、彼がゆっくりと引き金を引く。この期に及んで、まだ僕に恐怖を与えようとしているのだ。そして彼が、「死ぬ」と吐き捨てたと同時に、僕は全身を硬直させた。口をふさがれたままの鈴葉が発した、泣き声のような悲鳴を、反響する銃声の音がかき消していく。痛みはなかった。

どこを撃たれたかも分からない程だ。僕の体は、スローモーションで反り返り、床へと転がった。おかしい・・・と、ふと思った。痛みがなかったのは別にいいのだが、衝撃もなかったことが何とも妙だ。それに、感覚もしつかりしている。それとも死後もこんなふうな五感を保っていられるのだから。僕は奇妙な疑問を抱きながら、恐る恐る臉を持ちあげた。仰向けのため、世界が逆さまだ。上には床、そしてそこには見覚えのある足が見える。足元からゆつくりと下の方へ視線を移していく。ボロボロに破れたジーンズから、黒いワイシャツ、見え隠れする包帯、肩にかかる長い髪の毛、そして・・・包帯を巻いた、だけど、よく知っている綺麗な顔。

「なんだ。やっぱり天国か」

と一息ついて、

「違う!」

もう一度目を見開いた。

これは夢でも、まして天国でもない。その証拠に僕の両耳ははつきりと鈴菜の泣き声が聞こえてきている。僕は慌てて上体を起こし、自分の足を見た。ある。やっぱりだ。やっぱり僕は死んじやいなかった。

「遅くなって、しまいましたね」

背中からの懐かしい声に顔をあげ、わずかな沈黙をおいた後、ゆるゆると振り向く。

「大遅刻だ、流」

「いててて!」

流の肩をかりながら、何とか立ちあがると、突くような痛みが傷口から全身に伝わった。

「大丈夫ですか?」

「平気だよ。お前の傷に比べたらね」

僕は苦笑した。包帯だらけの彼に心配されるとは、何とも情けない。

「とにかく、エド・ゲインを何とかしなきゃ」

足元に仰向けになっている少年へと目を落とす。彼は右胸を撃たれ、やっと呼吸をしているといった感じだった。

引き金を引こうとした瞬間、逆のドアの前に立つ流に撃たれたのだ。

「何故だ、何故、い・・・きて、いる」

血走らせた眼は、流を映していた。

「まだ分からないんですか?それじゃあヒントを差し上げましょう」

エド・ゲインを見下しながら彼は言った。

「尚也君を見たとき、何となくですが不自然な感じがしてね。『もしや』と思ったのですが、やはり催眠術でした」

「まさか」

「そう、今あそこにいる彼は、仮装エド・ゲインではなく予備校生、斎藤尚也さんです」

流の言葉に、僕はふと横を見た。すると尚也君が、本当にすまなそうな顔を、こつちに向かつて深々と伏せた。しかもいつの間にかやってくれたのか、既に人質二人を拘束するものはなく、二人とも自由の身で、手なんか振ったりしている。

「敗因は、あなたの自信過剰な所でしたね」

銃口はエド・ゲインに狙い降ろされ、次の瞬間には無情

にも放たれていた。しかも残りの弾、全て。灼熱を飲み込んでいく彼の体は不自然に踊り、その度に鮮血を吹いた。カチツという音で、銃声は止み、呆気に取られていた僕は、その時初めて自分の口が半開きなことに気づいた。

「終わった、のか？」

僕は流の顔をのぞき込みながらきいた。

「まだ、息をしています。じきに止まるでしょうけど」

「そうか」

一息ついて、僕は言った。エド・ゲインの姿は、死ぬ間際のカムヤそっくりだった。

「忍！」

嬉しそうに張りあげられた鈴菜の声に振り向き、手を振りかえしてやる。何はともあれ、みんな無事でよかった。

コトリツ・・・

何かが床にあたるのを聞いて、ふと足元を見る。その音は流までは届いていなかった。彼は僕と同じように、彼女たちへ手を振り返している。

「・・・」

エド・ゲインには、何の動きも見られない。彼の口元が動いたのは、そう思った矢先だった。惨めたらしくも首に穴が空いているため、そこから空気がもれ、声にはならない。けれど、彼は確かにこう言ったのだ。

(ジ・・・ゴ・・・クデ・・・)

ヒュー・・・ヒュー・・・空気がもれる。

(ア・・・オ・・・)

ヒュー・・・またもれる。

(・・・ウ)

僕は息を飲んだ。

彼の血だらけの腕は、驚く程早く、そして力強く、重たい拳銃を宙へ放っていた。流や、鈴菜たちが気づいた時には、既に手の届かない所にあった。とっさに銃を構えた流も、弾の入っていないことに気づいて舌をうった。誰かの悲鳴がこだまする。多分、鈴菜だ。しかしそれを耳にした刹那、僕の中で何かが動いた。体内じゃない。もっと深い所だ。

「ベッキー！」

気がつくと、僕の右足は床を強く蹴っていた。

「うああああ！」

ちぎれそうな程、力いっぱい手を伸ばす。拳銃の先が触れた。今だ！

後ろへ叩かれたそれは、背中の方で確かに流にキャッチされた。が、万有引力はその名のとおり全てのものに共通であり、僕もまた例外ではない。今度は僕が、黒いタイルへ吸い込まれていく。もう駄目だ。けれどそう思った瞬間、法則は覆された。僕の体はまるで常識はずれに真横へ飛び、やがてどこかへ全身を叩きつけた。

「いってえ」

傷口を押さえながら、何とか起きあがる。

「忍、平気？」

驚いて顔をあげると、半ベそをかいている鈴菜の顔が真ん前にある。思わず僕は言葉を飲み込んだ。何がなんだか分からずに、周りを見渡す。地雷ゾーンの向こう側に流が立っている。

「忍はこの数メートルを飛んだのよ」

鈴菜の後ろでケイコさんが笑って言った。

「飛んだだって？だって僕、落下してから。そうだ、途中で変なふうになんか飛んだんだ」

「彼が忍をここまで引張ってくれたの！」

鈴菜の指さした先には、穏やかな顔をした尚也君の姿があった。

「あなたまで、死なせたくはなかった」

彼はうつむきがちに言った。『あなたまで』そう言ったのは多分、カムヤのことを前提として言っているのだろう。

かわいそうに、彼が一番の被害者だ。

「サンキユ、君は命の恩人だよ」

僕が言うと、向こうから流が付け足して言った。

「全員のね」

「そういえば流」

再び視線を彼に戻す。

「エド・ゲインは？」

「死にましたよ」

「そっか」

僕は壁へよりかかると、静かに眼を閉じた。部屋の中は驚く程穏やかで、落ち着けた。

「終わったな。僕らの勝利だ」

喫茶店OZ。



カランという鈴の音に振り返ると、ケイコさんがはにかんだように笑っていた。この暑い中、体にピッチリとしたボーダー柄のセーターと紺のショートパンツ、そして首もとにはアクセサリーがわりに結んだバンダナといういでたちだ。いつも大人ぶった服装をしていた彼女なので、それはいささか幼すぎるようにも感じられる。

「ごめんなさい。遅れちゃって」

息を弾ませながら流の隣へ腰を下ろす。吐き出された大きな息は、まさにやっと一息つくという感じだ。

「何か飲み物でも？」

僕の隣から、尚也君がメニューを差し出す。受けとった彼女は笑顔でそれに応えようと、迷わずドリンクの欄へ視線を落とした。ここはクーラーがきいているからいいものの、外は夏真っ最中なのだ。しかもそんな格好で来れば、喉も乾くだろう。僕は自分のコーラをストローでズズツと吸いあげながら、何げなく外を眺めていた。窓際の席なので、中からも外からもお互いが丸見えなのだ。目の前にある駐車場では、小学生くらいの男の子たちが四、五人でボール遊びをしている。この炎天下でよくやるものだとつくづく感心してしまう。高橋隆も、エド・ゲインなんかに覚醒されなかつたらあんなふうは無邪気に笑っていたのだろうか。友達と遊んだり、学校帰りに道草をしたり、それでちよつと淡い恋なんかしたりして毎日を過ごしていたのだろうか。そう思うと、胸のあたりが泣きたくなる程痛かった。

「忍」

流の声に慌てて向き直る。彼は僕を見てはいなかった。手元にある、アイスココアに映る自分を見つめていた。

「しかたなかったんですよ。ああするしか、方法はなかったんです」

それは僕に言っているのか？聞きたかったがやめた。多分、違う。

エド・ゲインとの戦いに幕が下りてから、早いもので二週間が経とうとしていた。僕らがこうしてお互い顔を合わせるのも、決戦後初めてのことだ。勿論、集合をかけたのは流である。みんながこの数日間をどう過ごしていたかは知らない

が、僕にとってこの二週間は、地獄の他、何ものでもなかった。というのも、エド・ゲインに撃たれた傷が原因で熱は下がらないわ、何をするにも壁づたいだわ、あげくの果て

には入浴も出来ないわと、まさに事切れる寸前の不自由さを満喫していたのだ。唯一ラッキーだったのは、彼の撃った弾が僕の足を貫通していたということだった。そうでなかったら、もっと面倒なことになってしまっただけで、本当にこたえていたかもしれない。

「それにしても」

と彼があごをしゃくりながら、僕の顔を見据えた。

「松葉杖とは痛々しいですね」

「うるさいな。流がもっと早く来てくれればこんなことにはならなかったんだからな」

「しかたないですよ。流さんだって怪我を負っていたんですから」

低い声で尚也君がかばいに入り、僕は口をつぐんだ。『僕のせいだ』彼は多分、言葉の中にそう付け加えたかったに違いなかった。流の傷は、未だ痛々しく残っていた。包帯のとれていない部分も幾つかあるようだ。けれど彼は、そんなそぶりを一切見せずに、努めて平静を装っていた。

彼なりの、精一杯の優しさなのだ。「これで少しでも、エド・ゲインに操られていた時のことは忘れてほしいと思ったが、多分すぐには無理だろう。無責任な言い方かもしれないが、これだけは時間がいつか解決してくれるのを待つしかない。ただ僕の怪我同様に幸いだったのは、彼が警察へ行かなくてもよかったことだ。カムヤの件がある以上、ただではすむまいと思っていたのだが、それは意外なことにこの、須貝流が全て解決してくれたのだ。驚いたことに彼は、頭に『腕利き』とつく程の一流の刑事で、連続殺人事件を以前から担当していたと言っただけだ。それをきいた時、僕は「何故黙っていた！」と憤然と抗議したものだ、彼が僕に隠していたのも、エド・ゲインの正体はつきりしなかったからであって、それを考えるとしかたのないことだということは、よく分かっていた。

まあ何はともあれ、偶然か必然かエド・ゲインがその事件の犯人だったため、事件の解決は、彼にとっては文字通り一石二鳥だったことになる。

「けどさあ」

僕はグラスの流した汗を指で拭いながら言った。

「実際すごいよなあ。まさかお前が刑事だったなんてさ」

「意外、でしたか？」

「いや」

僕は首を振った。

「一番似合っているよ。流に普通の生活は、何か似合わないし」

「刑事が普通じゃないように聞こえますよ」

「でも、よかったわよね」

と、チーズケーキを口へ運びながら、ケイコさんが言った。

「これで全員、覚醒はまぬがれたわけでしょ。私なんかもうちょっとでチャールズにのっとられるところだったのよ」

「そういえばチャールズはどうしたの？覚醒がまぬがれると、前世のみんなどうなっちゃうわけ？」

「ああ、それはねえ・・・」

「全て消滅してしまいます」

割り込んできた流を、ケイコさんが睨む。

「別に死んだわけではありませんよ。彼らは始めから死んでいるのですから。ただ、帰るべき所へ帰ったのです」

「そっか」

もう会えないと知ると、何だか不思議な寂しさが僕の胸の中で沸き出すようだ

た。彼は乱暴で、意地悪で口の悪い奴だったが、もう会いたくないとは思わなかった

た。つまり僕はそんなところもひっくりかえって、彼が好きだったのだ。

「そんなに寂しがらないで。彼、私の中で消える瞬間、少し笑ったわ。『あい』」

つによろしくな』って言いたそうにね」

ケイコさんの言葉に、僕は顔をあげた。

『『あいつ』っていつのは、当然、忍、君のことよ』

「そっか」

照れ臭く笑つと、僕はふと、あることを思い出した。それは、エド・ゲインが地雷ゾーンへ拳銃を放った時に起こった、あのとんでもない奇跡のことだった。みんなはあれを、僕が自分の勇気で飛んだと思っっているらしいが、実を言うと違う。そうじゃない。あの時、あの瞬間、それは鈴菜の悲鳴で突如起こった。彼は僕の中で一気に成長し、そしてほんの数瞬、僕の体を預かった。つまり床を蹴ったのは僕ではなく、覚醒したヘンリーだったのだ。僕からヘンリーに変わる瞬間、彼が『ベッキー！』と叫んだのは、あれは多分・・・。

「忍さん？」

尚也君の声に我に返り、慌てて顔をあげる。

「どうかしました？」

「いや、何でもないよ」

僕は笑顔を作りながらかぶりを振った。

するとケイコさんが、いたずら好きの子猫みたいな瞳を輝かせて、

「鈴菜ちゃんのこと、考えてたんでしょ」

「そ、そんなこと・・・」

打ち消す暇も無く、流が笑い出した。

「ちょ、違っつたらー！」

「仲いいんですね、忍さん」

「おいおい、尚也君まで！」

しばらくの間、店内には三人にぎやかな笑い声だけが飛び交っていた。

クーラーのきいた所に長居しすぎたのか、外は体温よりも高い温度を持っているような気がする。この辺が車どおりの少ないせいか、はたまたさっきまで遊んでいた子供たちがいなくなったからか、それとも、もっと他の理由があるのか、辺りは声を出すのもためらってしまう程静まり返っていた。まるで大きなフライパンのような熱い地面の上で、僕らは枝分かれした道をただぼんやりと眺めていた。

「お別れ、ですね」

しみじみと流が呟いた。

「そうね」

うつむきがちに、ケイコさんも言った。

僕は松葉杖で一步、前へ踏み出した。

「何だよ、お前ら、さっきまであんなに笑っていたのに急に沈んじゃってさ。別に一生会えなくなるわけじゃないんだから、笑ってさよならしようぜ」

「そうですよ」

付け足すように言ったのは、尚也君だ。

「そんなに沈んでいちゃ、本当に一生会えなくなるかもしれないですよ」

蝉の鳴き声が沈黙を埋め、ようやくあがった二人の顔は笑っていた。僕は何度か頷くと、高々と右手をあげた。

「またいつか会おうぜ！じゃ、またな！」

みんなに背を向け、歩きます。すると背中から、尚也君の声で「お元気で」と、ケイコさんの声で「またね」と、

そして、流が「いつかまた」と言ったのが聞こえた。僕は口元に笑みをこぼしたまま、前へ進んだ。けれど、急に生まれ静けさにふと足を止め、考えた。みんなはどの道を選んだのだろうか、流は右、ケイコさんは左……。駄目だ。そんなことを考えて一体何になるというんだ。僕は前へ進んでいく、それでいいじゃないか。僕は再び歩きだし、気がつくとき、アパートの近くの公園まで来ていた。この暑さからだろうか、中にはひとつ一人の影もなく、静けさだけを抱いている。

「忍う！」

不意に僕を呼んだ声に辺りを見回す。公園の門の前には、買い物袋を両手いっぱい持って、真っ白なTシャツをひるがえしている鈴菜の姿があった。首をほんの少しかしげると、彼女の耳たぶが銀の光でチカリと光る。珍しくピアスをつけているらしい。

「へそ、見えているぞ」

「エッチ！」

慌てながら、持っていた買い物袋でそれを隠す。

僕は笑いをかみ殺した。ヘンリーはもう、僕は中にはいない。喫茶店で流が言ったとおり、彼もまた帰るべき所へ帰ったのだ。けれど僕は、少なくとも以前の僕ではなくなっってしまった。彼の忘れていった、ちよつと無謀な勇気のせいだ。今の僕なら、彼の世話にならなくても迷わずあの地雷の中へ飛び込んでいっただろう。それともひよつとして彼は、わざと置いていったのだろうか。自分の恋人の生まれ変わりを、僕がしっかりと守れるように。

鈴菜は大きく手招きをしようとした。

「ねえねえ忍、この公園、隅っこにもすごく古い水道があるんだよ！すごく錆びているの。早くきてよー！」

「まったく。いつまで経っても”子供なんだから”」

僕はやれやれとため息をつきながら、僕にしか分からない理由で少し笑った。

The end

『DEAR PSYCHOPATH』 鎌田庸 著

sakka.org